

---

# 幻魔と妖魔

ランチュウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻魔と妖魔

### 【Nコード】

N6587H

### 【作者名】

ランチュウ

### 【あらすじ】

これは、幻魔と妖魔の長きにわたる激闘の記録を記したものである……。様々な世界で色々やかしている両族が戦ったらどちらが強いのか、これを見ればわかるかもしれない！？

## 第1話・ねるねる争奪戦（前書き）

今作は妖魔と幻魔がメインになるため、悪魔は空気です。最初、短編にしようかと思ったので、変な箇所がありますが、気にしないでください。鬼武者やクレイモアも出す予定です

## 第1話・ねるねる争奪戦

これは、デルタとマヤミが出会う一日前の話……。ある妖魔と妖魔がねるねるをめぐって争っていた。

妖魔と幻魔……。この二つの魔族は長年睨みあっていた。幻魔は昔々に鬼によって滅ぼされたはずだった……。

しかし、かろうじて生き残った幻魔は、ハンバーガーのおまけ作り、自宅警備員という新たなライフスタイルを作り出した。

そこに現れたのが、西洋からやって来た、人間を喰うことを止めた妖魔たちだった……。

彼らは鰻を焼いて売ったり、歌舞伎や浮世絵をさらに発達させるなど、日本人の文化に花を咲かせた。

裏舞台でしか活躍出来なかった幻魔は妖魔を怨んだ。そして、何かとぶつかりまくってきた。今回見せるものは幻魔と妖魔のつまらない争いの一つである。

ゼブラス

「やめろ、ねるねるは貴様の口には合わぬよ……」

デレイク

「喰ってみなきゃわからんぞよ?」

デレイクは触手でねるねるを引っ張る!

ゼブラス

「貴様、目玉に触手がついたような感じの……。ベアードがゼルゲノンになった感じの……」

デレイク

「いいから、ねるねるをよこすぞよ」

デレイクはさらになるねるを引っ張る！！

ゼブラス

「私のねるねるが欲しければ、１００万ドルよこしやがれ！！」

デレイク

「１００万ドルでどれくらいうまい棒が買えるぞよ？（笑）」

すると、ゼブラスは計算機で計算し始めた！

ゼブラス

「１ドルを１１０円とすると、１００万ドルは一億一千万・・・。  
うまい棒は一本１０円だから、１１００万本は買えるぞ」

デレイク

「それはよかったな！」

デレイクはゼブラスが脇に抱えていたねるねるを無理矢理引っ張った！

その時！！！！

ぱああーーーーーん

デレイク

「あああああああああ！！！！」

ねるねるのケースはぐちゃぐちゃに割れてしまった・・・！！！！

ゼブラス

「お前・・・」

デレイク

「返品するから１００万ドル返して」

ゼブラス

「純粹にふざけるな（笑）」

## 第1話・ねるねる争奪戦（後書き）

他の連載物と違って、第9天魔王のメインキャラはほとんど出ないため、よくわからないキャラが出ることもあります。 “ 第9天魔王 ” のキャラ紹介で紹介していると思います（オリジナルキャラのみ）

## 第2話・ファービー改造（前書き）

ファービー改造とか、機械技術の競い合いかと思ったら・・・食べる話になってる。ヘレンが襲ったり襲われたりするぞ！？



## 第2話・ファークビー改造

妖魔は機械の改造を得意としていた。しかし、ある失態を侵した・・。

ある妖魔が人を串刺しにしている様を見た妖魔が、それを再現した機械を人間に造らせた（マシン）。

それを知った妖魔は頭にきて、妖魔の造った弾道ミサイルをばらし、ゲーム機を作ったのに対して、妖魔はゲーム機を破壊し、そのプログラムで凶悪な無人兵器を作ったりと技術を競いあっていた。今回は、あるおもちゃの改造を目論む妖魔と、それを阻止しようとする妖魔の話である。

ゼブラス

「では、ファークビーを改造するか・・・」

と、言ってゼブラスはファークビーに手を出した。その時、ゼブラスはファークビーと目を合わせてしまった！！  
ゼブラスはあまりの恐さに動けなくなった！  
すると、脱クレイモア・ヘレンがやってきた。

ヘレン

「おつ、こんな所に妖魔がいるよ？」

どうしたんだよ、そんな所でうずくまって？」

すると、ゼブラスは震えながら言った・・・。

ゼブラス

「なあ、お前・・・自分のこと人間だと思っているか？」

ヘレン

「当たり前だろ！あたし、人間なもの」

ゼブラス

「そうか・・・前田前田か。よかったな。・・・だったら、これを見てどう思う？」

ゼブラスはヘレンにファービーを見せつけた！

○ ○

ヘレン

「は？」

○ ○

ヘレン

「・・・こええ。どうすることもできねえ・・・（涙）」

ヘレンは怯えて泣き出した！！

ゼブラス

「くそお、どうすれば、こいつの目を見ないですむのだ？」

すると、目の前に目が三つの幻魔が現れた！

ゼブラス

「お前はテレサー！！」

ミツメル

「天さんのことを言いたいのか？残念だが、俺は天津飯というご馳走ではない。俺はヒヤッハーなモヒカン幻魔・ミツメルさ！！」

ゼブラス

「ミツメル？確かに、こつちみんな的な目だな」

ミツメル

「それよりよ、うまそうな生き物持つてんじゃん！俺に食わせるよ」

ゼブラス

「こ、これはダメだ！！これは私が改造するんだからな」

ミツメル

「なんだよ、おめーもギルデンスタンみてえなタイプか？」

ゼブラス

「多分、そうかもな！」

ミツメル

「そいつ、喰わせてくれねえなら、そこの牝狐喰うぞ？」

ゼブラス

「喰えば？」

ミツメルはそういわれると、牝狐ヘレンの尻にかぶりついた！！

ヘレン

「いつてえー！！なんだよ、この変態モヒカン野郎！！！」

ミツメル

「ひえーーーー！助けてくれーーーー！！！」

ミツメルがヘレンから逃げてる間、ゼブラスはファービーを近くに  
あつた箱に隠した！

ゼブラス

「これで一安心・・・」

見ると、変態丸が料理をやっていた。

ゼブラス

「何やってんのお前、出るところ違っじゃん！」

変態丸

「俺も一応妖魔だからな。しかし、さっきの光景、おもしろかったぞ。俺もあの女の柔らかさそうなお尻をかじりたかったなあ・・・」

ゼブラス

「お前は、ウンディーネかレイチェルの尻でもかじってな！」

変態丸

「そいつ、可愛いのか？」

ゼブラス

「いや、むしろ・・・“可愛がってくれる”と思う」

変態丸

「ふーん、機会があつたら会ってみたいな。  
それより、電子レンジのボタンを押してちょ」

ゼブラス

「あ？これか？」

ゼブラスは電子レンジのボタンを押した……。よく見ると、中にファーマーが入っていた！

ゼブラス

「しまった！！私はファーマーを電子レンジの中に……！！！！」

しかし、もう手遅れだった……。

ファーマー

「発火ドウドウ」

びりりっ……。バシューーン！！！！

電子レンジは爆発した！そして、ファーマーのバラバラ死体が散らばった。

ゼブラスはファーマーの破片を口に入れた……。

ゼブラス

「ポリポリポリ……。うん、うまいっ！」

テレッテレーン

変態丸

「え？うまいの？俺も喰う」

変態丸はファーマーの破片を食べた！

変態丸

「うまい！毛皮のパリパリ感がたまらない！」

ゼブラス

「溶けかかった目玉もイケる！！」

二人が何かを食べているのを見て、ヘレンとミツメルも興味本意で戻ってきた……。

ヘレン

「お前ら、何喰ってるの？」

ゼブラス

「ファービーだよ！お前も、喰う？」

ヘレン

「あ、あたしはそんな薄っぺらいプレートが入った肉なんか、喰いたくないよ！」

ミツメル

「俺は喰う！アヒャツハー！！今夜はご馳走だ！！！！！」

三人は仲良くファービーを食べ始めた！ヘレンは気持ち悪くなって、その場を離れた……。

ゼブラス

「こんどは肉詰めにしよう！！」

変態丸

「その次はから揚げに……」

ミツメル

「その次の次は消毒して喰おうぜ！」

これで解ったことは・・・妖魔も妖魔も仲良く食べ物を分け合えることだ！

## 第2話・ファービー改造（後書き）

よい子は絶対に、おいしそんでも、ファービーを食べてはいけない  
！！！！



### 第3話・へたれんぼう（前書き）

今回は妖魔の素朴な弱点がさらけ出されている。オチもありきたりな気もするけど……。あれをパクってしまったが、大丈夫かな？  
あの傘ババアの顔より。

### 第3話・へたれんぼう

妖魔は戦闘能力に長けている。そのため、その血肉を体内に取り入れて、強化された人間も多い。

しかし、妖魔にも弱点というものはある。今回はその弱点をさらけ出した結果、とんでもない悲劇が生じた妖魔の話である。

ある日、妖魔ゲドウが早朝に散歩していると、ゴーガンダネスと出会った。

ゴーガンダネス

「拙者の名はゴーガンダネス。幻魔界最強の剣士!!」

ゲドウ

「俺は妖魔界最強の剣士だ!!こんど一緒に、バトルしようよ(ドナルドっぽく)」

ゴーガンダネス

「おう!場所は大阪城の公園。深夜零時にバトルだ!!」

すると、ゲドウは焦りだした・・・。

ゲドウ

「なあ・・・夜は迷惑にならないか?」

ゴーガンダネス

「昼のほうが迷惑だろ。観光客もいるんだしさ。まっ、決闘を楽しみにしてる」

ゴーガンダンテスはとつと去ってしまった・・・  
ゲドウは震え出した！

ゲドウ

「夜とかヤバイじゃん。だって・・・だって・・・お化けでるじゃー！ーん！！！」

ゲドウはへたれの三人を呼んで、相談した。

ユマ

「なんだよ、こんな朝っぱらから・・・。

昨日はシンシアにこき使われてろくに眠れてないんだ」

ゲドウ

「こっちは真剣なんだ！！貴様・・・文句いうようならば、命よりも大切なあほ毛をちょん切るぞ！？」

ユマ

「ひいっ！！ごめんなさいい（涙）」

変態丸

「で、相談ってなんだ？」

ゲドウ

「お前らは、お化け怖くない？」

モスマン

「お化け・・・？うーん、人間の怖くないか？」

ゲドウ

「人間なんか、すぐ倒せるから怖くない」

モスマン

「あの……。その倒された……。殺された人間がお化けになるんだよ？」

ゲドウ

「はああ！？俺は知らぬ間にお化けを増やしていたのか……。もう人間殺せねえー！！！」

ユマ

「あのさ、なんでお化け怖いんだ？」

ゲドウ

「だってよく、攻撃しても効かないんだぞ！？ヤバくないか？それに背後に回り込んでいたり、キモい顔で笑いながら実体化してきたりしたら、コワスのキワミだよ！！！」

変態丸

「あのね、俺ね、ある人が見たっていう長い爪を持つ、四つん這いのハイジャンプ怪女をね、深夜零時の大阪城で見かけたよ。しかも、身長がチエ・ホンマンくらいあったぞ！」

ゲドウ

「ああーぎゃああー！！！」

ゲドウはひっくり返った！！！！

ユマ

「それ……。何かの妖魔じゃないの？」

ガラテア

「すまん。それ、悪のりした私だ」

変態丸

「・・・アホな・・・」

深夜11時、ゲドウは道頓堀でうずくまっていた・・・。

ゾルバ

「さっさと行けよ・・・」

ゲドウ

「無理だつて！！いつ幽霊が俺を襲つて来るか、わからねえ！！！」

ガラテア

「だから、あの怪女の正体は私だと言ってるだろ」

ゲドウ

「正体のほうが怖いから！！」

すると、ガラテアはキレてゲドウをお姫様抱っこした！！！！

ゲドウ

「いやぁー！！ん！！何するのー！！！！？」

ガラテア

「お前を強制的に大阪城に連れていく」

ゲドウは大阪城に連れて行かれた。大阪城の公園に着いたものの、

ゴーガندانテスが見当たらない・・・。

ゲドウ

「さっさと倒して、帰りたいのに・・・。なにやってんだあいつは」

公園を見渡すと、奥に傘をさしている女性がいた。

ゲドウ

「あの、ここらで剣士を見かけませんでしたか？」

すると、その女性は振り返った！その顔は見るもおぞましい顔だった！！！

ゲドウ

「ああっーぎゃはあああ！！！！！」

ゲドウはまたぶっ倒れてしまった！

ジュジュドーマ

「あらあら、私のあまりの美しさにひっくり返っちゃった。ゴーガندانテスは、スイカの食べ過ぎで腹を壊して、来れないみたいだよ」

ジュジュドーマはそういうと、立ち去った。

後ろに控えていたへたれ三人衆が助けにきた！

ユマ

「大丈夫か？」

変態丸

「大丈夫なわけないよな。あんなキモい顔、真昼に見てもビビるわ」

モスマン

「ゴーガンダントレスを知っていたってことは、奴も幻魔か。あれは危険すぎる。色んな意味で」

ゲドウは目を覚ました。

ゲドウ

「うつ・・・。何なんだ今は・・・」

ゲドウがうつろな目でふと木のほうを見ると、変態丸が見たという怪女がゴソゴソと、何かやっていた！

ゲドウ

「アッー！また、ヤバいのがー！！！」

へたれ三人衆もその怪女に気づいたが、何ともなかった・・・。

ユマ

「ガラテアさん、またやってるよ」

モスマン

「やーいガラテア！お前は身長のほうが恐ろしいぞー！！！」

変態丸

「ガラテア、正体バレてもなお、人を脅かしたいんだな（笑）」

すると、ユマのケータイがなった。ユマはケータイに出た。

ユマ

「はい、もしもし。もう、アッー！ほ毛の話題は止めてください」

ガラテア

「何言ってるんだお前、私だ。ガラテアだ。今、ミリアーズと飲み会をやってるんだ。お前も事が済んだら、早く来い」

ガラテアは電話を切った……。それを聞いた四人は顔から血の気がひいた……。

ゲドウ

「なあ、あそこにいるのは……。一体、誰なんだ？」

ユマ

「……ぎゃー……す……！」

ユマが叫ぶと同時に一同は逃げ出した！！



### 第3話・へたれんぼう（後書き）

なんか、今までのシリーズの中で1番の良作な気がする。まあ、サザエさんやクレヨンしんちゃんみたいに、一話で終わる話ばかりだからかな？

#### 第4話・ある実験（前書き）

幻魔が出ない、妖魔がメインになっている。あいつらが友情出演。そして、あのキャラにスキャンダラスな事実が！？

## 第4話・ある実験

ゾルバはある事を考えていた。妖魔ゲドウの心霊嫌いはどうにかならないのかと・・・。

ゾルバ

「奴は、妖魔や幻魔は何ともないようだ」

変態丸

「でも、ジユジドーマでめちゃくちゃ怖がってたよ？」

ゾルバ

「あれの場合は、顔がアレだから仕方ないのさ・・・」

そこで、ゾルバはてるてるに相談した。

てるてる

「奴の心霊に対する強度は、実験で見極めてみるか・・・？」

てるてるの出した案はこんなものだった

- ・ 幼女を幽霊見立てたらどうなるか？
- ・ 気持ち悪いキャラを差し向けたら、幽霊じゃなくてもビビるのか？（ジユジドーマで確認されたが、念のため）
- ・ 女子だと思っていた奴が女装少年だと知ったら？
- ・ ユマが美人になっていたら、どんな反応する？

と、いった内容だった。

変態丸

「ほとんど心霊じゃないじゃん。でも、1番と4番、下手すると3番に期待」

てるてる

「では、始めるか」

まずは幼女を幽霊に見立てる作戦だが、肝心の幼女が見当たらない！

てるてる

「幼女いないのかよ？」

変態丸

「（心の声：こいつロリだな。俺もだけど）今のところ、幼女の妖魔はいないみたい」

すると、ゾルバが小さい娘を連れてきた！

ゾルバ

「デルタから拉致ってきた！！」

フォーミュラー

「実験終わったら、ギャラくれるんだよね？さっさとやろっ」

てるてる

「かわええの、最近の幼女は・・・」

ゾルバ

「見た目は可愛いけど、性格は可愛くない」

すると、フォーミュラーはゾルバの後ろに回り込んで、包丁を突き立てた！

フォーミュラー

「今、頭にきてんだ。ムカつく発言しないでよ（笑）」

変態丸

「怖い・・・」

さつそく、実験は始まった！

ゲドウ

「あれ、こんなところに何で幼女が？」

フォーミュラー

「居て悪い？」

ゲドウ

「いや、いてもいいけど・・・。君、なんて名前なの？」

フォーミュラー

「あたし、お化け!!」

ゲドウ

「ふーん、お化け・・・。はっ、はあ、ええ!？」

・  
ゲドウは震えながらあとすざりした！すると、フォーミュラーは・・・

フォーミュラー

「あたしがお化け？・・・違う。あたしは悪魔だ！！ふっふははははは！！！」

と、なぜか発言を撤回してしまった！

ゲドウ

「なんだよ、幽霊じゃないのかよ、よかった」

最初の実験は失敗してしまった！

フォーミュラー

「ごめんなさい・・・。つい、ブロッコリーの真似をしちゃって・・・（涙目）」

ゾルバ

「ブロッコリーじゃなくて、ブロリーっていいじゃないか・・・」

てるてる

「可愛いから、普通にギャラくれてやる」

フォーミュラー

「わーい！やったー！！！」

ゾルバ

「第二の実験は、何を使って実験すんの？」

てるてる

「ケロニアっていう植物宇宙人。実は作者の嫁」

ゾルバ

「そんなことどうでもいいから、ケロニアとゲドウを合わせるぞ」

ゲドウはケロニアと出会った！すると、ゲドウはすぐにケロニアに危機感を覚えた！

ケロニア

「握手しませんか？」

ゲドウ

「いやだ！！お前の手なんか触ったら、自分の手が腐る！！！」

てるてる

「あいつ、見た目で判断しているようだな・・・」

ゲドウ

「てめえ、キモい。消えろよ」

するとケロニアは胸を押さえて倒れ込んだ！そして爆発した！！

ゲドウ

「けっ、臭い花火だ」

ゲドウが見た目で判断するような奴だと知ったゾルバはキレた！

ゾルバ

「盟友とて許せねえ！！」

ゾルバはゲドウに心霊動画を見せた！！

ゲドウ

「ひいー！！こええ．．．！！わかった！俺が悪かった！！これからは見た目だけでなく、性格でも判断するからあ！！」

こうして、ゲドウの悪い癖を一つ直した！

三番目の実験は女装少年が必要だったが、あいにく妖魔に女装少年はいなかった．．．。

てるてる

「そういや、妖魔って．．．。幼女や女装少年はともかく、女性キヤライなくね？ぶつちぎりの不細工すらないとか．．．虚しいだら？」

ゾルバ

「そう言うと思って、オメガからデスを連れてきた！」

デス

「さっさと終わらせよう．．．。」

すると、フォーミュラーはデスに抱き着いた！

フォーミュラー

「お兄ちゃん．．．。逢いたかったあーん（泣）」

デス

「フォーミュラー、見ない間に大きくなったな．．．（涙）」

三年ぶりの兄妹の再会に、一同はしばらく実験のことは忘れてしまったが．．．。



ゾルバ

「・・・早くやれよ」

と、いうわけで実験スタート!!

デス

「始めまして・・・。僕は・・・私は、デス・・・です」すると、ゲドウは淡々とした様子だった。

ゲドウ

「うんうん。そうかそうか。お前みたいな娘が女の子なわけないもんな」

デス

「え・・・?」

ゲドウ

「隣からお兄ちゃんって声が聞こえてきたから、まさかと思ったら・・・」

実験は失敗してしまった!

ゾルバ

「おい、実験・・・。ずさん過ぎないか?」

てるてる

「そ、そんなことはない・・・」

変態丸

「絶対に二番目以外のやつがやりたかったただけだろ・・・」

すると、ユマが現れた！

その顔は、ユマとは思えないほど美しかった！

ユマ

「メイクに三時間かった・・・」

変態丸

「わあ、まるでオードリーみたい」

春日

「皆さん、世界を春日色に染めませんか？」

ゾルバ

「はいはい、オードリー違いね。うんうん」

春日

「へっ！」

春日には帰ってもらって、さっそく実験開始！

ユマ

「ゲドウさん、私を見てどう思いますか？」

ゲドウ

「どう・・・って、いつもより綺麗だよ、失禁のオードリー」

オードリー

「きゃーーーー！！！！（赤っ恥）」

てるてる

「おおっ、恥ずかしい秘密をすけすけと言つとは……まさに外道だ！」

ユマ

「私、ユマなんですけど……」

すると、ゲドウは……

ゲドウ

「そんなケバいメイク顔のユマより、いつもの顔のユマのほうが俺は好きだな……」

てるてる

「な、なんだと……!?!」

すると、ユマがウキウキしながら帰ってきた！

ユマ

「ゲドウさん……私に気があるんだ……」

てるてる

「いつもの顔が好き……か。つまり、あいつはブスが好きなんだな。まあ、ジュジュドーマみたいなのはさすがにないと思うが……」

シンシア

「ユマさん、妖魔に恋をするってことは、もう……（嘲笑）」

ユマ

「・・・(泣)」

ゾルバはゲドウから真相を聞いてみた・・・。

ゾルバ

「お前、本気で好きなのか？」

ゲドウ

「あほ毛に惚れた・・・」

ゾルバ

「くだらなすぎて・・・、悲しすぎる」

実験の結果

- ・ 幼女を幽霊と見間違えることはない。
- ・ 見た目で判断する。
- ・ 男と女の見分けはつくらしい。
- ・ ユマに惚れてる(特にあほ毛に)

これで判ること・・・目は悪くなさそうだが、女を見る目は盲目に近い。

#### 第4話・ある実験（後書き）

ユマの扱いは、ひどいのか、優遇しているのか……。ユマって、  
ミリアーズで1番弄られてるような……。

## 第5話・ミリアのストーカー（前書き）

あのミリアを狙う変態が二人現れる。このミリアはなぜか幻影を使わない。と、いうか使えなくなる。変態のまがましい妖気によって……。そんな時に意外な人物が！？

## 第5話・ミリアのストーリー

妖魔も幻魔も恋をする。たとえ、種族が違っても守り抜こうという本能が働くやつもいるらしい。

今回はそんな変態に狙われてしまった自称17歳の姉さんとその友達の話である。

ある日、ミリアはラグリアスに物申すために神聖ラグリー帝国にきていた。

ミリア

「人喰い妖魔を倒してもらうように頼んでみるか・・・」

この世界では、人の味方をする妖魔とミリアーズは仲が良いようだ。ミリアが城に入ると、なんか城の中が暑いと思った・・・。

ミリア

「（心の声：おや？なんか暑いな・・・。前に来た時はクーラーきいてたのに・・・）」

すると、廊下に妖魔皇帝・ラグリアスが倒れていた・・・。ミリアはすかさずラグリアスを起こした。

ミリア

「どうした、しっかりしろラグリアス！！」

・・・まさか、組織にやられたのか？」

すると、ラグリアスはうつろな目で

ラグリアス

「ミリアに看病してもらうと、体温が上がる（興奮）」

ミリア

「それは、どういたしまして。  
で、一体誰がやったんだ!？」

ラグリアス

「オーバーヒート妖魔・シューゾーンだ・・・」

ミリア

「シューゾーン・・・？そいつは組織の刺客か!？」

ラグリアス

「違う・・・。我が軍で作り出した妖魔。熱い男を元に作り出したらしいが・・・。ウロヤズクがシューゾーンの胎児に直射日光を当てたらああなったらしい・・・アッー!」

ラグリアスが叫んだ。ミリアは背後からすさまじいが来るのを感じて、振り向いた。

すると、メラメラに燃えている人型の妖魔がいた。

ミリア

「お前が城の室温を・・・。って、なんだその顔は・・・。  
なんでそんなにテカっている・・・!?!?!？」

すると、シューゾーンはいきなりキレた!

シューゾーン

「見た目で判断すんじゃないーよ!?!?!」



ミリア

「・・・するよ（苦笑）」

シューゾーンはミリアの顔色を見て、何か悩みがあるのを察した。

シューゾーン

「どうしたんだ、顔色が悪いぞ。友達の悩みか？」

ミリア

「ああ・・・。今日は心の友のヒルダの命日なんだ」

シューゾーン

「そうだったのか。まあ、くよくよするなよ」

ミリア

「ああ・・・」

シューゾーン

「それより、お前は今日から、俺の嫁だ!!」

ミリア

「?????へ?」

ミリアは一瞬、何言われたか理解出来なかった。  
すると、ウロヤズクがやって来た。クーリツシュを持って・・・。

ラグリアス

「おおっ、私のために買ってきてくれたのか!」

ウロヤズクはラグリアスを無視して、シューゾーンにクーリッシュを飲ませた

シューゾーン

「ゴクツ……。へああっ」

シューゾーンはヘブン状態になった！

シューゾーン

「のどごし パラダイス！！！」

すると、シューゾーンの炎が消え、さっきよりマシな室温になった。

ラグリアス

「ウロヤズク……。何という愚行を……。！！！」

すると、ウロヤズクは焦ってこう言った！

ウロヤズク

「変な女に脅されてやってしまったのです……」

ラグリアス

「その女は一体なんなんだ！？」

ウロヤズク

「なんか、『ミリア隊長がここに来るから、シューゾーンを発動しろ』と言われ、なぜだと聞いたら、『暑くなれば、ミリア隊長は服を脱ぐはずだから、それを拝みたい』と、すさまじい気迫で迫ってきたのでつい……」

その女、たしかタバサと名乗っていた」

ミリア

「あいつ……。何企んでいる……。!?」

すると、シューゾーンはまた業火を放ちながら、キレた！

シューゾーン

「あんなアイスで俺を止められるわけねえだろ、ええ!?」

また、すさまじい室温に戻ってしまった！

シューゾーン

「ミリア、俺の子供産めよーーーーー!!!!!!」

ミリア

「純粹に嫌だ」

シューゾーン

「恋のチャンスを、諦めんなよ!!そこでーーーー!!!!!!」

ミリア

「私、イスレイカリガルドみたいな男が好みだから……」

シューゾーン

「好き嫌いすんじゃねーよ!!」

その時、いきなり城の室温が下がった!!

シューゾーン

「寒い」

ラグリアス

「うわっ！ーいきなり室温がかわったから、心臓がおかしくなったぞ・・・！？」

すると、玄関に青白い男が立っていた。

ヒエール

「暑苦しい奴は嫌われるぜ。私みたいにクールな男でなければミリアは幸せになれない」

ヒエールはそこから離れると、ミリアの目の前に瞬間移動した！

ラグリアス

「奴は、幻魔ヒエール・・・。南極の果てで眠っていた男・・・」

ヒエール

「ミリア、慎んで君のダーリンになろう」

すると、ヒエールはミリアの手にキスをした！

彼の唇のついた部分はなんと凍傷になった！

ミリア

「（心の声：こいつ、キモい。私のこと想ってるならまず、触ってこないで・・・）」

これを見たシューゾーンは、大激怒した！！そして、ものすごく燃えだした！

シューゾーン

「てめえ、女心分かってねえよ!!」

ヒエール

「お前だって、ミリアの身体を狙ってる癖によ・・・」

シューゾーン

「見た目で判断すんじゃないよ!!」

ヒエール

「あ、シジミ」

シューゾーン

「なに!!?」

シューゾーンはシジミを探し始めた!

すると、ヒエールはミリアの胸に向かって手を伸ばした! (本性)

ヒエール

「揉ませろ!!!」

ミリア

「なっ!?!」

ミリアは不意をつかれた!しかし、ラグリアスがヒエールの手をハンマーで破壊!!

ヒエール

「ぬわあ!!腕があ!!!!」

ラグリアス

「お前の、氷のような手で胸を触っても、柔らかさは・・・わかるまい？」

ヒエール

「おのれえ、妖魔皇帝め……。いつも人間の味方をしておって・・・。そんなに、人間が大切か？」

ラグリアス

「人の心がない奴は・・・死んだらどうだ？」

すると、シューゾーンがキレた！！

シューゾーン

「シジミがトウルルって頑張ったのに、全く取れねえ！！  
てめえがミリアのストーカーだからだ！！！」

すると、シューゾーンはミリアの後ろに回った！

そして、シューゾーンはミリアのお尻に手を伸ばした！

ラグリアス

「おまえもかー！！！！！」

ラグリアスは盾でシューゾーンを押し出した！

シューゾーンを遠ざけたが、盾はあっという間に溶けた！！

ラグリアス

「くそっ、囲まれてしまったか・・・。

逃げろ、ミリア！こいつは俺が止める！！！」

ラグリアスがそういうと同時に、ミリアは逃げ出した！

二人はミリアを追い掛けようとした。すると、ラグリアスが目の前に現れて叫んだ！

ラグリアス

「ミリアを愛しているなら、この俺を倒してからにしろ！！」

シューゾーン

「熱くなれよーーーー！！！！」

ヒエール

「凍え死ねーーーー！！！！」

ラグリアスは二人の技を喰らった！！

ラグリアス

「ぬがぁーーーー！！！！」

ラグリアスは体の体温が狂って倒れた！

シューゾーン

「俺の嫁ーーーー！！！！」

ヒエール

「私のマイ・ワイフーーーー！！！！」

二人はミリアを追いかけ始めた！

一方、ミリアは奥の部屋にやって来た。ミリアはその部屋の中に入った！

すると、予想だにしない人物と出会った！

ミリア

「ヒル・・・ダ・・・？」

ヒルダ

「うん。私だよ。ヒルダだよ」

ミリア

「あの時、死んだはずじゃ・・・」

ヒルダ

「バイオテクノロジーで生き返ったんだよ。室温がいきなり上がったから、眠りから覚めたんだ」

すると、ミリアは泣きながらヒルダに抱き着いた。

ミリア

「嘘みただけど・・・。幻じゃない・・・。幽霊じゃない（涙）」

すると、あの二人がやって来た！

ヒルダ

「ミリア・・・。あの時誓ったよね・・・。一桁ナンバーになったら、共に戦おうと・・・」

ミリア

「ああ、そうだったな。これが初めての戦いだな」

ミリアは変態二人に迫られて、何もできなかった。

しかし、かつての心の友が現れてくれたおかげでいつもの自分を取り戻した！



ミリア

「さあ、死にたければこい！」

ミリアはそう叫んだ！

しかし、変態二人の視線はヒルダに集中していた！

変態二人

「ヒルダ可愛い！！俺の嫁だ！！！」

ヒルダ

「え？」

ミリア

「心変わり、早っ！！」

変態な二人、こんどはヒルダを巡って争い始めた！

シューゾン

「氷系のお前がヒルダを幸せに出来るとでも思ってたのかよ！？」

ヒエール

「ああ・・・」

シューゾン

「何言ってるんだ？」

ヒエール

「おっさんは売れ残り（ガラテア）と戯れてな！」

シューゾーン

「何だとー！ー！？」

二人は喧嘩を始めた！

ミリアとヒルダはポカーンとしていた。

すると、タバサが黒いボールを持ってきた！

タバサ

「ミリア隊長は誰にも渡さない！ヒルダはどうなってもいいけど」

タバサは黒いボールを変態二人にぶつけた！すると、ボールが爆発し、喰らった変態二人は戦闘不能になった！

ミリア

「・・・」

何となく戦闘が終わり、ミリアは帰ることになった・・・。

ミリア

「私は帰るが、ヒルダはどうする？」

ヒルダ

「私はラグリアスさんの介護をする。ラグリアスさんが回復したら、組織と一緒に倒そう」

ラグリアス

「ヒルダが介護してくれるなんて・・・。俺…………（興奮）」

タバサ

「じゃあ、お世話になりました」

ミリアとタバサは帰った……。

帰ったあと、ラグリアスはかすれ声でこう言った。

ラグリアス

「ミリアのストーカー……。まだ、いる……」

ヒルダ

「え？あの変態二人は逮捕されたし、もう……」

ラグリアス

「ミリアを付け狙う、真のストーカーは……。タバサだったんだ。あいつ……。ミリアの尻や胸をジロジロ見ながらよだれ垂らしてたり、氷の反射を利用してスカートの中覗こうとしていたぞ？」

すると、ヒルダは微笑みながらこう言った！

ヒルダ

「ミリアは、私が見ない間に愛される人間になったんだよ。きっとミリアはいい部下に恵まれてるんだろうなあ」

ラグリアス

「うん、そうだな。心配する必要はないよな」

ラグリアスはすっかり安心してしまった……。

ラファエラとルシエラがトランスフォームして、ルシラファになってしまっていることを知らずに。

## 第5話・ミリアのストーカー（後書き）

今回ののは今まで書いた小説で最も字数が長い・・・。そしてグダグダな展開。簡潔にシューゾーンとヒエールの恋のバトルにしとけばよかった。

## 第6話・6000字耐久レース（前書き）

突然、組織を壊滅！？しかし、リムトが倒せない。倒すには極端な条件が必要なようだ！内容はぐだぐだな残念会だが・・・突如、クレアの大切な人が、恥ずかしい服を着て現れる！！！！！！

## 第6話・6000字耐久レース

ついに、組織の長・リムトを殺すことになった妖魔軍団。深淵喰いやアリシア・ベスを難無く撃破し、幹部をぶった切りまくり、ついにリムトの元についた！

リムト

「ここまで来たか、愚か者め」

ゾルバ

「我れら妖魔一族の恨み、ここで晴らす！」

ゾルバは切り掛かった！

しかし、跳ね返った！なんと、リムトの回りをバリアが覆っていた！

リムト

「私を倒したければ、6000字突破しろ。でないと私は倒せぬぞ！」

ゾルバ

「くそお・・・」

ゾルバは軍を率いて立ち去った！

リムト

「代わりは何人もいる。部下も、戦士も・・・」

ゾルバ達は残念会を開いた・・・。

ゾルバ

「くそっ、あの血管浮き上がりじじいめ」

ゾルバはそういってユマの尻を蹴った！

ユマ

「痛いっ！」

ヘレン

「まあ、組織のやつはあいっただけなんだから、気長にいこう」

ヘレンは酔っ払ってるのか、ゼブラスを口説いてきた！

ヘレン

「おっさん、あたしを愛人にしてえん」

ゼブラス

「黙れ牝狐。私には愛妻がいるんだ」

てるてる

「おらあ、もっとビールの泡食えよ！」

バク

「もう、食べられませんよ・・・」

ゲドウ

「ユマ、俺とキスしろぉーい！（酔）」

ユマ

「え？ちよっと・・・うぐうー！！」

てるてる

「あっ！ユマとゲドウがチューしてるぞ！

ひゅーひゅー！」

シンシア

「所詮、くずのファーストキスはくずなんですネ！（嘲笑）」

みんながドンチャン騒ぎしているなか、ミリアとクレアは冷静だった！

ウロヤズク

「どんちゃん？たしか、ハム太郎にそんな犬いたな！」

デネヴ

「なにナレーションにツツコミを入れているんだか……」

ミリア

「リムト……。最後の最後で、厄介な仕掛けを……」

クレア

「6000字がどうのこうの言っていたが……。どういう意味だ？」

ゼブラス

「そうだ……。リムトの奴、夜逃げするかもしれん。何とかせねば……」

ゼブラスはまたリムトの部屋に入った！



リムト

「何しに来た？」

ゼブラス

「ここに防犯カメラを付けるんだよ！」

ゼブラスはぱつぱと防犯カメラを取り付けると、さっさと帰った。

リムト

「ふふふ。私は逃げも隠れもさんのに……。あのカメラ、戦士が来たら壊させよう」

しかし、それは叶わなかった。なぜなら、戦士たちはみんな暇を出してしまったからだ！

一方、残念会のほうは……。

ゾルバ

「妖魔と人間……。あと、妖魔や悪魔が笑って暮らせる世、いつか出来るかな？」

ゲドウ

「組織産の妖魔の殲滅、人間に成り済ました邪悪な奴らの“破壊”も関わってくるな」

そう言いながら、ユマのあほ毛をいじくるゲドウ……。

ゾルバ

「なあ、強姦ダンス……。呼んだほうがよかったかな？」

ゲドウ

「ゴーガンダンスだ」

??

「ゴーガンダンス……。お前ら、あいつを知ってるのか？」

いきなり、変な男が尋ねてきた！

ゲドウ

「あ？誰だ、一体……。って、松田優作！？」

その男は松田優作……。によく似た男だった。

柳生

「俺は柳生十兵衛。よく松田優作って呼ばれるが、そんなに似てるか？」

クレア

「ああ……。似ている」

ゲドウ

「俺、いつかゴーガンダンスを倒したいんだけど……」

柳生

「ゴーガンダンスは俺が倒したはずだが？」

ゲドウ

「はっ、はぁ……。ええ！？ってことはダンスは幽霊！？うわっ  
—————！」

その時、外ですごい音がした！

ゾルバ

「な、なんだあ!？」

外に出ると、ダフがひっくり返っていた。

ダフ

「あだだだだ……。なんだこいつ、こうげきがあたらねえ」

柳生

「なっ!? ゴーガンダネス、生きてたのか!？」

ゴーガンダネス

「久しぶりだな十兵衛!では……」

拙者の名前は、ゴーガンダネス。幻魔界最高のお、剣士!」

ゾルバ

「どうしたんだダンネス。なんでダフを攻撃した!？」

ゴーガンダネス

「攻撃してきたのはダフのほうだ。中の人が同じとか言い出して、襲ってきたのだ」

ダフ

「みのおやじとも、なかのひとがおなじだから……」

すると、上空からコンブの触手が伸びてきた!

リフル

「だから、ゴーガンダネスには勝てないでしょって言ったのに……」

「。帰るわよ！」

ダフ

「くそ。つぎにあうときは、あのふえをつかってやる」

ダフはリフルと一緒に帰った！

ゾルバ

「俺の夢、また一つ増えた」

クレア

「リフルを倒す夢か？」

ゾルバ

「いや、リフルのあのコンブみたいな触手を食べたい」

クレア

「・・・せいぜい頑張れ」

クレアは微笑んだ……。テレサのように……。

てるてる

「さあーで、今夜は飲み明かすぞ」

みんなは残念会をラグリー城で再開した……。

ラグリアス

「ヒルダ、お前も一緒に楽しんだらどうだ……？」

ヒルダ

「いいんですよ。私はあなたが治るまで、一緒にいてあげますから・  
・」

ラグリアス

「ヒルダ、せっかく生き返ったというのに・・・苦勞をかける」

ラグリアスは泣きながら言った・・・。

そのころ、再生室から、一人の女がはい出てきた・・・。  
そうとは知らず、まだ残念会は続いていた！

レイチエル

「まったく、あのハゲども、俺達をこき使いやがって・・・。  
おらっ、猿っ！酒を注げ！！」

変態丸

「ひいいい・・・。こんな筋肉女だなんて、聞いてないよ」

レイチエル

「ああ、てめえ筋肉バスター喰らいたいか？ええ！？」

変態丸

「ひいいいっ！ごめんなさいいっ！！」

てるてる

「もっと、料理作れ、バカヤロー！！」

ラガン

「じゃあねえなー。池に住んでるアヒルを使うしかないな、こりゃあ」

ロレッツ

「お酒、まだ飲むんですか？」

ゾルバ

「あ？女、お前も飲みたいか？」

ロレッツ

「いえ……。まだ未成年ですから……。僕……」

ゾルバ

「せっかく女妖魔だと思ってたのに……。妖魔にも女装少年がいたのか……。！！」

ルネ

「うん、この酒の味は銘酒・妖魔無双だな！」

フクロウナギ

「へえ、酒に詳しいんだね。」

ところで、その髪型は何なの？魚を呼ぶ擬餌？」

いろいろ来ていた！

その時、バニースーツを着た何かが襲ってきた！

ゾルバ

「なんだ……。！？」

てるてる

「メインディッシュの踊りか！？」

よく見ると、テレサだった！

クレア

「テレサ・・・？」

クレアは呆然とした。

ヘレン

「あひゃ？テレサって誰？」

すると、馬鹿な回答がでた！

ウロヤズク

「ばあさん？」

テレサ

「違う」

てるてる

「歌手？」

テレサ

「違う」

ゲドウ

「まさか・・・。お化け！？」

テレサ

「違う」

レイチエル

「みんな、分かってねえな。三つ目のハゲの事だろ？」

テレサ

「それは天さんだ・・・」

クレアはしばらく眺めていたが、次第に目から涙が溢れ出した。

クレア

「テレサ・・・」

テレサ

「お前は・・・まさか、クレアか？」

クレア

「テレサ・・・。テレサぁー・・・。（涙）」

テレサ

「まったく、成長して一人前の戦士になったくせに、まだ泣き虫だな・・・」

テレサはそういうと、クレアの頭を撫でた。クレアはテレサに泣き付いて離れようとしないう・・・。

ゾルバ

「感動的だけど・・・。なんでテレサ、バニースーツ着てるんだ？罰ゲームか？」

ウロヤズク

「まさかあいつ、私のコスプレ用の服を！？・・・いや、何でもない」



ミリアは今までのいきさつをテレサに話した。黒幕は組織で、ここにいる妖魔は善良な存在だということも・・・。

テレサ

「うむ・・・。私も組織が怪しいとは思っていたが・・・。

ここにいる妖魔が無害なのは分かっている。こんなマヌケ顔の奴らが人を喰うとは思えない・・・。」

バク

「僕、マヌケ顔ですか？」

フクロウナギ

「わいは人喰うよ！」

そういうと、フクロウナギはユマを飲み込んだ！しかし、

テレサ

「別にいいさ、そんなくず・・・。」

と、冷酷に言い放った！

クレア

「でも・・・。腐っていても、へたれでも大切な仲間・・・なんだ」

クレアはそう言ったが、その顔は明らかに笑っていた・・・w

そのころ、ゼブラスはリムトを監視していた。

ゼブラス

「あいつ、逃げないのか……。ま、逃げようとすればビームで死ぬがな……」

ゼブラスがそう言っていると、同僚のてるてるとウロヤズクが来た。  
てるてる

「まさか、この企画でゼブラスとまた会えるとはな……」

ウロヤズク

「リムトって、もしかしたら本体が別の場所にあるんじゃないのか？地下深くに巨大な脳みそがあるとか……」

ゼブラス

「あいつ、一人暇そうだから、シヨウヘイヘーイでも流してやるか」

ゼブラスはリムトの部屋にシヨウヘイヘーイを流した！

シヨウヘイヘーイ

リムト

「な、なんだ……。この声は……。！？」

リムトは苦しみだした！

と、思うとリムトは煙のよつに消えてしまった！

ゼブラス

「あれ？」

てるてる

「もしかして……」

ウロヤズク

「倒した・・・!?!」

すると、三人は大急ぎでみんなに報告した！  
すると、歓声が沸き起こった！

ゾルバ

「よくやった！これで世界は安泰だ!!」

ゲドウ

「これでもう、半人半妖は生まれまい・・・。祝い酒だ!!」

ヘレン

「あとは・・・人間に戻れたら最高なのに・・・」

???

「ならば・・・人間になっちまえ!!」

突如得体のしれない妖魔が襲来した！

ダラウス

「人間にも、妖魔にもなれないやつあ、せつかくだから、人間にな  
っちまえ!!」

ダラウスはヘレンに怪光線を放った！ヘレンは食らってしまった!!

ヘレン

「てめーみたいな化け物は死にやがれ!!」

ヘレンは剣を持って腕を伸ばそうとした！  
しかし、伸びなかった！

ヘレン

「あ・・・あれ？」

デネヴ

「ちょっと瞳の色を見せてみる・・・」

デネヴはヘレンの瞳の色を見た。

なんと、瞳の色が人間と同じ色になっていた！！！！

ヘレン

「ま、まさか・・・あたし、本当に人間に・・・？」

ダラウス

「もうお前は忌み嫌われる半人半妖ではなく、か弱い人間だ。

狩られる側になったとはいえ、人間と結婚したり、子供産んだり出来るんだ。

うれしいだろ？」

ゾルバ

「今はお前が出る幕じゃないだろ！！」

ゾルバはダラウスを殴りつけた！

ダラウス

「あほっ！」

ダラウスは恐持てな暗黒妖魔から、マヌケそうなアホ面妖魔になっ

た！

ダラウス

「やあ、おはよお！」

その変わりように、テレサが・・・

テレサ

「ダラウス・・・。お前一体何者だ？」

ダラウス

「僕はねえ、二重人格があるみたいなんだあ」

ダラウスの奇妙な喋り方にデネヴは、

デネヴ

「お前、なんでそんなになまってるんだ！？」

ダラウス

「あほっ！僕みたいな喋り方を習いたいのお？」

デネヴ

「いや、習いたくない・・・こともない」

すると、ゾルバが尋ねてきた。

ゾルバ

「なあ、ヘレンを……。人間になってしまったヘレンをまた元に戻せないか？」

人間になりたがっていたとは言え、まだ全てが終わったわけじゃない

いんだ」

ダラウス

「そうだったのお？でも人間になってしまった限り、基本的にはどうすることもできないよぉ！」

ヘレン

「そ、そんな」

ヘレンは落胆した。その姿を見たダラウスは可哀相になったのか、あることを提案した。

ダラウス

「それじゃあ、願い玉を持ってきてよ！」

ゾルバ

「願い玉？」

ダラウス

「うんっ！それがあれば願いを三つ叶えられるんだ！」

「ただ、僕みたいな特殊な妖魔じゃないとうまく使えないみたい・

・」

ゼブラス

「それは一体どこに・・・？」

「??？」

「私が持っている」

と、声がした。

ゲドウ

「その声は……。ばいきんまん!？」

????

「違うな」

ゾルバ

「ヴィクセンでおk」

テレサ

「ころころころころ!?!?!」(マジ焦り)

クレア

「(心の声：テレサが焦っている……。そんなにとんでもないのか?)」

目の前に現れたのは黄金の像だった!

リムト

「驚いたか?ゴミどもよ……」

テレサ

「お前よりゾルバの爆弾発言に驚いた」

リムト

「ああ、あれは半分だけ正解だ……」

ゼブラス

「もう半分は?」

リムト

「ゾルバ、来い」

リムトはゾルバと一緒にどこかへワープした！

ゾルバ

「なんだ、ここは・・・」

そこは生物の気配がしない、黒い太陽がメラメラと燃えているという暗黙の世界だった！

ゾルバが眺めていると、黄金像に魂を移したリムトが襲い掛かってきた！

ゾルバ

「その黄金像・・・。民から搾取した金から出来ているな？」

リムト

「そうだ・・・。驚いたか？」

ゾルバ

「やはり、貴様はいてはならぬ者だ！！！！  
変幻神化！！！」

そういうと、ゾルバの体は光りはじめた！

リムト

「変幻神化？」

ゾルバは光の勇者のような姿に変形した！！



ゾルバ

「妖魔一族の恨み、ここで晴らす!」

リムト

「何を言う。見た目が変わったくらいで勝てると思っているのか?」

ゾルバ

「見た目で判断すんじゃないね!」

ゾルバは持ち前の二刀流で黄金像の両手を破壊した!

リムト

「くっ、だが私を葬ることは出来ん」

リムトはビームを放ってきた!

ゾルバはリムトのビームを剣で受け止めた!すると、剣が聖なる光に包まれた!

ゾルバ

「いけええ!」

ゾルバはリムトの脳天に切り掛かった!

バリアは張られていた。

しかし、バリアは徐々になくなり、そして剣はバリアを破壊し、黄金像の脳天を切り裂き、体を一刀両断にした!!!

リムト

「6000字を・・・越えたというのかあ!」

リムトは爆発した！  
願い玉を落としていった……。

ゾルバ

「これで終わったな……」

ゾルバが玉を拾って帰ろうとしたその時、どこからリムトの声が聞こえてきた……。

リムト

「ゾルバ、黒幕は我ら組織ではない……。

我が組織を倒しても、あのお方を倒すことは出来ぬ……。ははははは」

リムトの声が聞こえなくなったあと、ゾルバはしばらく立ち止まっていた。

そして、こうつぶやいた……

ゾルバ

「ならば、黒幕を滅すまで、戦い続けてやる」

ゾルバはそう言って、元の世界に戻った……。

みんなはゾルバを心配していた。

ゲドウ

「ああ、戻ってきたかゾルバ。クレイモアの奴らは帰ったが？」

ゾルバ

「そうか……。あと、願い玉を持ってきたぞ」

ダラウス

「あほっ！これで願い事が三つ叶うね！」

ゾルバ

「リムトが、黒幕はまだいると言っていた・・・」

ゼブラス

「つまり、奴らは一つの壁に過ぎなかったか・・・」

ダラウス

「それじゃあ、願い玉で何とかしよう！」

ゾルバ

「いや、願い玉の力無しで戦いたい」

ゲドウ

「せいぜい、頑張れよ」

ゼブラス

「お前は心霊嫌いを願い玉の力で治してもらえ！」

ゲドウ

「なっ、何言ってるんだよ！」

また・・・平和が戻ってきた！

## 第6話・6000字耐久レース（後書き）

次回作のことを考えて、原作の所にドラゴンボールのカテゴリを追加！あと、お詫びが一つ。リムト、6000字いつてないのに死なせちゃった・・・。

第7話・もしもウンディーネがブロリーっぽくなったら（前書き）

ウンディーネの筋肉を見ていたら思いついた。レイチエルより、こちらのほうが筋肉だったので迷わずウンディーネでやった。へたれ王子はあの人がやっています

## 第7話・もしもウンディーネがブロリーっぽくなったら

ゾルバが無事に帰還して、喜んでいた妖魔達。  
しかし、ウロヤズクは青ざめた顔だった・・・。

ゲドウ

「どうしたんだウロヤズク。なんか、ヤバいことが起きることを知  
っちゃったかのような顔して」

ウロヤズク

「やばい……。再生したウンディーネがない（怖）」

ゲドウ

「あの筋肉がどうした？」

ウロヤズク

「やつの再生の時に、悪ふざけでブロリーの遺伝子を組み込んでし  
まったのだ！」

?????

「やはり、ウロヤズクのくず野郎っぷりにはへどが出るな」

ゾルバ

「おっ？お前は！（笑）」

ゾルバはしゃがみだした！で、????の正体はガラテアだった！

ガラテア

「ラグリアスに、クラリスが自重しないくらい強くなりだしたこと

を相談しに来たんだが・・・」

ゼブラス

「目のほうは治ったか、シスターラテア」

ガラテア

「ああ。お前の手術のおかげで、視力が0.7くらい回復したぞ。  
・・・そこのお前、なにしゃがんで私を見ている？ちなみに、今日  
穿いているパンティーは赤色だが・・・？」

変態丸

「にやにい！？みへろー！ー！！（鼻血）」

ゼブラス

「ガラテアさん、エロ猿が興奮するような事は、言わないことです  
な・・・」

と、言つて変態丸を吹き飛ばすゼブラスをよそ目に、ゾルバはこう  
言い放った！

ゾルバ

「大女のパンツなんか、見たくないから。  
いや、しかし大きい女だなあ。俺でも見上げるくらい大きい女だな  
あw」

ゾルバがしゃがんでガラテアを見ていたのは、ガラテアがさらに大  
きく見えるようにするためだった！

ガラテア

「一度死んでみる。お勧めだぞ？（怒）」

ゲドウ

「どうやら、奴の中では、パンツよりも身長のことを言われるとキレるようだな」

ウロヤズク

「ガラテアのパンティーは気になるが（エロw）、それよりもウンディーネを早く探して、ブロリーの遺伝子を取り除かなくては・・・」

「

その問題のウンディーネは、ナース服で城内を徘徊していた。

ウンディーネ

「ここはどこだあ？」

ウンディーネはキッチンに入った！

ラガン

「誰かと思ったら・・・。なんだ、ゴリラ野郎。勝手に野菜盗み食いすんなよ・・・」

ウンディーネは野菜に目を向けた！すると、ニンジンが目に映った！

ウンディーネ

「・・・ぬうつつ・・・。カ・カ・ロ・ットォー！！  
カカロットォー！！！！！！」

ウンディーネはいきなりキレた！筋肉が凄まじく膨張し、目は白目になり、凄まじい妖気を放出し始めた！



ウンディーネ

「カカロットはどこにいるんだ？」

そういうと、ウンディーネはラガンの頭を掴み上げた！

ラガン

「た、助けてくれ」（涙）

ウンディーネ

「助けて欲しい？助けるってこういうことかあ？」

ウンディーネはラガンを壁に当てた！

ウンディーネ

「出てこい、カカロット……」

ウンディーネは城のホールまでやって来た。

ウンディーネはゾルバを見た！ゾルバの髪型がカカロットに似ていたので、ウンディーネはすぐさま襲い掛かってきた！！！！

ウンディーネ

「カカロットオーーーーー！！！！」

ゾルバ

「なんだ！？」

ウロヤズク

「ウンディーネがキタヨ、これーーーー！！」

すると、ウンディーネは緑の玉を放ってきた！

ガラテア

「危ない！」

ガラテアはゾルバをつきどはし、代わりに攻撃を喰らってしまった！

ゾルバ

「大丈夫か！？」

ガラテア

「ああ……。私は防御型だから……。そんなことより、ウンディーネを早く……。止める……」

ゾルバは城から出た！

ウンディーネはゾルバをカカロットと思っているのか、一緒に出てきた！

ウンディーネ

「お前が戦う意思を見せなければ、あたしはこの星を破壊し尽くすだけだあ……！」

そういうと、ウンディーネはシャモ星人飼育場に向かって緑の玉を放った！

奴隷ども

「アッー！うわあ、きゃあッー！……！」

ウロヤズク

「ああっ、放し飼いにしておけば勝手に殖える、食用にも実験動物にも奴隷にも使えるシャモ星人がああ……！！……！」

ウンディーネ

「ふははは！うはははは！！」

ゲドウ

「あんなやつ、生かしておいたら、本当にこの星は破壊しつくされてしまう！！」

すると、ウンディーネはまた暴れ始めた！

ウンディーネ

「カカロット、必ず血祭りに上げてやる！！！！」

ウンディーネはいきなりゾルバを殴ってきた！

ウンディーネ

「力こそが全てなのだ！！！！」

ゾルバ

「ぬう、ぐあつ！！」

ウンディーネ

「とっておきだあ！！！！！！」

ウンディーネは特大の緑の玉をゾルバにぶつけた！

ゾルバ

「ガアアアッ！！！！！！！！！！」

ゾルバが嫩られているころ、援軍にきたオードリーは震えながらお

もらししていた・・・。

オードリー

「みんな、殺される・・・。もうだめだわ・・・。おしまいよ・・・。  
（涙）」

すると、回復したガラテアがやって来た！

ガラテア

「なに、おもらししてるんだ。さっさと倒すぞ」

オードリー

「何言ってるの！？あいつは伝説の超筋肉なのよ！！！？」

すると、城の奥からラグリアスがやって来た！

ラグリアス

「奴に勝つには、変形合神するしかないな・・・。」

ガラテア

「変形合神？」

ラグリアス

「てるてる、ウロヤズク、ゲドウ、ラガン・・・変形合神だ！！」

5人は集まった！そして、こう叫んだ！

五人

「変・形・合・神！！！！」

すると、五人は合体した。  
ポジションは

本体・ラグリアス

右手・ゲドウ

左手・てるてる

右足・ラガン

左足・ウロヤズク

と、なっております！

ガラテア

「説明はいいから、早く行け」

ラドルガロ

「五人合わせて、ラドルガロ！！では、行きまーす！！！！」

ラドルガロはウンディーネに向かって突進した！

ウンディーネ

「雑魚が合体したとて、あたしを越えることは出来ぬう！！！！」

ラドルガロ

「ゾルバ、私と合体だ！」

ゾルバは変形して、ラドルガロの胸部にくっついた！

ウンディーネ

「なあにいい！？」

ラドルガルバ

「六人合体・ラドルガルバ、ただ今参上!!」

ウンディーネ

「なんて奴だ・・・!!」

ラドルガルバ

「くたばりやがれ!!!」

ラドルガルバがマツキス砲でウンディーネを葬ろうとしたとき、ウンディーネの腹部が大剣が貫通した!

ウンディーネ

「ぬがあっ!!!?!?」

大剣を投げたのはデネヴだった・・・。

デネヴ

「許せ、ウンディーネ・・・」

ウンディーネは苦しみだした!ウンディーネの筋肉はしぼみ、妖気が消えた・・・。

ウンディーネ

「うつっ・・・」

デネヴ

「ウンディーネ、もう一度眠れ・・・」

デネヴは動けないウンディーネをお姫様抱っこして、奥の部屋まで

行った。そして培養液の入った水槽に入れた。

デネヴ

「これでよし・・・と。しかし、この部屋にはたくさんの再生された奴が眠ってるんだな・・・」

デネヴはウロヤズクにウンディーネの正常化を頼むと、黙って帰った。

その頃、ゾルバは何を思ったか、ガラテアをお姫様抱っこしていた！

ゾルバ

「お前、こういうことされたことないだろう？  
大きいのも罪だよな」

ガラテア

「お前、傷だらけなのに無理するな・・・。それに身長のことば言  
うな！！」

「ただ、うれしく思うぞ・・・（はあと）」

また、いつもの日々が始まる。

第7話・もしもウンディーネがブロリーっぽくなったら（後書き）

ブロリーっぽくないと言われてもなにも言えません。なぜなら、ウンディーネであって、本人ではないからだ（当然だ）。しかし、クレアをお姫様抱っこしていたガラテアが、イケメン妖魔にお姫様抱っこされることになるとはな・・・。



## 第8話・まさかのキャラ紹介（前書き）

まさかのキャラ紹介。一応、クレイモアのキャラも紹介しているが、いろいろと崩壊しまくり（ここだけの設定もあり。マジなのもある）。キモい・エロい描写が一部あり。年齢も一応つけといた。クレイモアのキャラにも・・・。

## 第8話・まさかのキャラ紹介

### 妖魔の部 オリジナルキャラのみとなる

ゼブラス・・・妖魔幹部の一人。機械を改造したり、生き物を手術するなど、かなり技術に長けている43歳。

変態丸・・・彼女ができることなく28歳になった変態妖魔。モスマンは友人。で、ユマとモスマンでへたれ三人衆をやっている。

ゲドウ・・・妖魔界最高の戦士・・・らしい？が、心霊にはぶっ飛ぶほど弱いことが判明した。ユマとは恋仲にある。25歳。

モスマン・・・UMAのはずなのだが、ここでは妖魔に分類される。昔から存在が確認されているにも関わらず、27歳と若い。

ゾルバ・・・妖魔一族の運命を守るために戦っているらしい。ガラテアの巨体を心配する23歳である。

てるてる・・・生き物の改造に長けた38歳。本編で出していた栃木弁がない・・・。黒いハゲ。

シューゾーン・・・松岡修造をモデルに作り出された妖魔。なので彼と同じ41歳（実年齢は生まれたばかりの赤さん）である。とにかく熱い。鬼武者3のラスボスより熱い。が、えげつないストーカーで、ミリアの尻を狙ったために逮捕される。（ミリアの尻でアッー！を企んでいたという、おぞましい説もある）

ウロヤズク・・・バイオ生物を作り出したり、人を生き返らせたり

するのが得意な39歳。コスプレが好きだが、6・7話で二着盗まれたようだ。長いかぎ爪で敵と戦える。

ラグリアス・・・妖魔皇帝。なんだがヒルダを気に入っている37歳のおっさん・・・だが、実はガラテアと同年！？

バク・・・夢を喰らう妖魔。ビールの泡も食う。フクロウナギはライバル。

ラガン・・・ラグリー城の料理長。盗み食いは見逃さないが・・・。実は強いという噂がある22歳である・・・。

ロレッツ・・・女装少年の妖魔。女妖魔ではなかったが、オッサンばかりの妖魔には珍しい15歳の少年妖魔である。女子の中に混じって戯れるという野望を持っていたりする？

フクロウナギ・・・深海魚の妖魔。食うで相手を無言即殺できる。

ダラウス・・・普段はおっとりとした口調で話す優しい妖魔だが、何かがあると凶暴化する。半人半妖を人間にすることができる。

ラドルガロ・・・ラグリアス、ゲドウ、てるてる、ウロヤズク、ラガンが合体した姿。何かと強い。

ラドルガルバ・・・ラドルガロにゾルバが加わった姿。格段に強い。ブロリーと互角に戦えそうだ。

クレイモアの部

クレア・・・主人公。だが、何かと暴走する。冷静そうで冷静じゃ

ない23歳。テレサが生き返ったため、仇討ちは取やめになった・。  
。中の人繋がりで人間の内蔵を親父に食べさせられたとも？

ミリア・・・幻影で相手を翻弄する。が、幻影もろとも敵を吹き飛ばすようなキャラがいることを知らない。その容姿から身体を狙われまくる27歳（中の人には17歳らしいが・・・）。タバサが真のストーカーなのは知らない。

ヘレン・・・手足が伸びるゴム女（足が伸びる描写、見たことないが？）で、一部からは牝狐ヘレンと呼ばれたりする。たしかに、狐の様に狩りがうまい25歳。

デネヴ・・・再生力はピッコロと同レベル。ヘレンとは心と身体を許しあえるほどの友。ウンディーネも一応友人。ウンディーネが生き返ったにもかかわらず、打ち落として培養水槽へ封印したのは、剣を返したくなかったからという異説がある25歳。

タバサ・・・ミリアの真のストーカーらしい。しかし、妖気を感じする力はかなりのもので、アガサを倒すときは活躍した23歳。アニメで紋章が二ーナになっている所がある。ヒントはユマのヘタレが確定してしまったあのシーン。

シンシア・・・おっとりしていそうなキャラだが、ユマに対する毒舌はデネヴよりもムゴい。足がクレアよりも早いらしい・・・。回復を早めることができるらしい。が、回復封じも出来るため、ユマが怪我するのを愉しみにしている23歳。

ユマ・・・ミリアーズで最も弄られるキャラ。

普段はシンシアに弄られるが、ヘレンの怒りを買ったり、クレアにデデン されたりすることも。ヘタレとは言え、彼氏にゲドウというハンサム妖魔がいるので、恋愛では7人の中で1番恵まれている

るといえる（ただし、このせいでさらにシンシアにいじめられている。クレアにもラキという駒がある）。実はヤムチャより強くなっ  
た！

ヒルダ・・・ミリアの心の友。一桁ナンバーになったらミリアと一緒にに戦おうと思っていた矢先、オフィーリアという、鬼畜女に改造されて覚醒者になってしまっても、理性があった。ミリアの手で死んだが、ウロヤズクの力で生き返った28歳。現在はラグリアスの体の世話をしている。

ガラテア・・・大女。

公式では身長185センチとなっているが、185“メートル”の間違いだという説があったが、さすがにそれはないと思われる2メートル女。37歳の年増だが、見た目は老けないので気にしてない模様。ゾルバに恋をしているという説も流れているが、身長を気にかけて恋愛を諦め、シスターになってしまったからには・・・。盲目になっていたが、ミアータの顔見たさにゼブラスの手術を受けて視力を回復した。

オードリー・・・お笑い芸人でもない、女優でもない礼儀正しい美女。ただし、怯えると21歳にも関わらずおもしろしをする傾向にあり、決してブロリーやリフルに会わせてはいけない！隠れへたれらしく、その情けなさに元ナンバー3のガラテアも呆れるほど。実はリフルも内心クスだと思っていたりw

レイチエル・・・真の筋肉女。ごついとは言え、レクセウスと間違えてはいけない。彼女の構えがゴルフを思わせるため、プロゴルフアー・レイチエルと言われた21歳。ちなみに漫画のある場所に彼女のヌードがあるらしいが・・・？

ルネ・・・髪型がめんどくさそうな女。足は早いらしい。コンプに監禁されるも何とか脱出。相手の妖気を操作させられそうになっらしい。ここでは酒の飲み比べができる。さらにユマとは双子という驚愕の設定が出来た！（あほ毛、唇、垂れ目とかがそっくりだから）そのため、24歳。

テレサ・・・クレイモア史上最強。

アリシア、ベスも彼女の手にかかれば刺身と化す。

リフルを刻みコンプにすることも出来たらしい。

が、クレア（当時12歳）と出会って、人間らしさを取り戻した。クレアを人間に任せるものの、心配になりクレアの元に戻る。

そこでお頭ドモンとダメキその他大勢の人間を殺害したため、バーロー達に追われることに。所詮クズはクズだった（イレーネとプリシラ以外のやつ）。しかし、プリシラに情けをかけたために、討ち死にした。が、ウロヤズクの力で生き返る。クレアと出会った時の年齢が29歳くらいだったので今は40歳くらいである・・・？

ウンディーネ・・・偽筋肉女。獅子男に倒されたが、ウロヤズクの力で生き返った29歳乙女。なぜかブローリーの遺伝子が入っていたため、とてつもなく凶暴化した。妖魔軍団が苦戦するほど強かったが、デネヴに打ち落とされて、培養液の水槽に封印された。

幻魔（鬼武者キャラあり）

デレイク・・・目玉から触手が生えたような幻魔。ねるねるを手に入れようとした。喋り方がウザい。

ミツメル・・・天津飯にモヒカンが生えたような幻魔。食えるものは一応食う。牝狐の尻に噛み付いたりする。火炎放射で消毒作業をしだしたりすることもある・・・。

ゴーガンダンテス・・・変態紳士。名乗るのが趣味。髪型がアレだが、マジで強い。ダフとは中の人が同じとも言われている。十兵衛に倒されたらしいがなぜか生きている。

ジユジユドーマ・・・とてつもない不細工。だが、若い頃は美人だったが、男を“食べ過ぎた”ためにこんな姿になる。一回だけ磯野フネになったことがある。傘からビームを出したり、紛らわしい凶器で切り掛かって来るなど、何気に強い。安国寺が助けに来ると、湿度が上がる。

ヒエール・・・氷のように冷たい幻魔。女をおもちゃ・モノとしか見ていないという外道っぷり。熱帯で絶対零度級の吹雪を起こせるほどの実力の持ち主。キスされた部分は凍傷になる。ミリアの胸を狙っていたら逮捕された。（ミリアの胸ではふぱふぱしようと企んでいたという、とんでもない説がある）その他の部

ファアービー・・・ギルデンスタンが改造したフクロウだとも、ウロヤズクが作り出した禁断の生命とも言われているが、単なるおもちゃだという説が有力。電子レンジで調理したり、バラバラに惨殺されたりと酷い扱いをされたりしているがシャモ星人に比べればまだ軽いらしい。

怪女・・・長い爪を持つ、四つん這いのハイジャンプ女。最初はガラテアのイタズラだと思われたが・・・。

フォーミュラー・・・ある実験のためにやって来てくれた悪魔の少女。兄のデスと、まさかの再開を遂げる。

デス・・・ある実験のためにやって来てくれた悪魔の女装少年。口

レッツというホモ達ができたアッー！

ケロニア・・・植物宇宙人。リフルがコンブなら、こいつは海苔。  
心を痛めて自爆した。

リムト・・・組織の長。バリアで攻撃から身を守ったが、ショウヘイヘーイには負ける。が、魂を黄金像に移してゾルバに襲い掛かるも、爆殺された。6000字いかなくても倒せた。

柳生十兵衛・・・鬼武者。銃で死ぬ際は、なんじゃこりゃー！？と、叫びながら死ぬ。歌がうまいらしい。母親が美人。だが、ブスに殺害される。この日を境に鬼武者として生きることを決意。孫がオレ少女、親戚に闇野原ひろし1がいる。（闇野原ひろし2は松永久秀）

ダフ・・・イスレイ、リガルドの次に強いリフルの最愛の男。リフルの最高の彼氏。平仮名でしか喋れない。いきなり泣き出したりすることがある。リフルを受け止められるらしいが、どう考えてもクウラの地球が吹き飛ぶほどのボールを、体全体で受け止める力力ロットみたいな状態を想像してしまうのだが。

リフル・・・一見かわいらしい少女だが、その正体は巨大な昆布型覚醒者。レイチエルにタコ女と言われている（これがリフルの逆鱗に触れた）。ルシエラとラファエラがくつついているという、大変価値のある生ゴミを拾ってきた。が、ウロヤズクガルシエラ2をひそかに造っていたのを知らない。ダフの最高の彼女。言うまでもないが、女戦士の中では最もババ・・・アッー！

シャモ星人・・・ブローリーが惑星シャモから連れてきた奴隷。だったが、実は食料にも、実験動物にもできることが判明した！こ



いつらのおかげで何体の妖魔が人喰いをやめられたことか・・・。  
雑食でよく増えるらしい。一匹1000円くらい。ちなみに惑星シ  
ヤモが創業者の悪ふざけで消滅してしまったため、養殖者しかいな  
い。中にはペットにしたり、話し相手にしたりするようだ。

## 第8話・まさかのキャラ紹介（後書き）

明らかに幻魔が負けているので、活躍の場を与えねば！新たな幻魔も出さねば！

## 第9話・やつあたり（前書き）

アガサを殺しめる（こらしめる＋殺す）くらいの話なので、長くない。まさかの本物登場！？

## 第9話・やつあたり

ラグリアスは願い玉の使い道をどうするかについて会議した……。

ラグリアス

「一つ目ヘレンを元に戻す、二つ目は私の傷を癒す……」

するとゾルバが物申した！

ゾルバ

「我々の合体方法はセコいんじゃないでしょうか？」

話が逸れすぎていて、場の空気が重くなった。

が、ラグリアスはなんと……

ラグリアス

「そうだな。我々の合体方法は微妙かもしれん」

と、皇帝が話を変えてしまった！

ゼブラス

「では、ダイカイオーを使って我らの合体方法の糧にしますか？」

ラグリアス

「ダイカイオーって、何？」

ゼブラス

「色々と変形する“蟹”です」

ラグリアス

「そうか……。では、ちよつくら捕りに行つてくる！」

ラグリアスは軍を率いて行つてしまった！

ゼブラス

「通販で買えるのに……」

すると、ヒルダがやってきた！

ヒルダ

「あの……。私、ラグリアスに惚れちゃったんですけど……」

ゼブラス

「は？」

ヒルダに惚れられたとは知らず、ラグリアスは軍へと、いつてもいつものパーテイを引き連れて進んでいた。  
すると、目の前に死んだはずのアガサがいた！

ラグリアス

「か、蟹だ！」

みんな、奴を引つ捕らえろ！！

アガサ

「簡単に私を捕まえられる？」

アガサは触手で襲い掛かってきた！

ゲドウ

「うまそうな蟹だな」

ゾルバ

「それは性的な意味でか？食欲的な意味でか？」

ゲドウ

「食欲的な意味だよ。あんな眉毛無しくそババアなんかイラネ」

アガサ

「ふざ・けるな」

アガサは大地全体を豪快に耕した！

農民

「手間が省けただ」

すると、あとからゼブラスがやってきた！

ラグリアス

「どうしたんだ？」

ゼブラス

「すいません、ダイカイオーは蟹じゃなくて、海老です」

それを聞いた途端、ラグリアスは心の底から怒りがこみあがった！

ラグリアス

「よくもだましたな！！！」

と、ゼブラスではなくアガサに攻撃を当てた！

その威力は凄まじく、アガサはあっという間に本体だけになってしまった。

アガサは近くにあったにんじんを引っこ抜いて手に持った！

アガサ

「近づくんじゃねえ！！さもないと、このにんじんを食うぞー！！」

ラグリアス

「なんて卑劣な雌蟹なんだ・・・」

農民

「オラの野菜を返してクレア！」

農民は何気なく言った。

場の空気が、薄くなった・・・。

アガサ

「それとも私に食べられたい？（性的な意味で）」

ゲドウ

「うるせえ、このカビ野郎！！」

この様子を、偶然通り掛かった大男が聞いていた！

ブロリー

「・・・ぬっつ、カ・カ・ロ・ット」

ブロリーは緑の玉を放った！玉はアガサにぶつかった！！

アガサ

「ふざけるなああ!!」  
「ブロリイイイ!!!」

デデン

アガサは爆発した!

ブロリー

「所詮、ベニズワイガニはベニズワイガニなのだ・・・」

ラグリアス

「次の回で主役やっていいぞ」

ブロリー

「なあに!!?」

「ハハハハ!!そこなくては面白くない!!!」

次の回ではブロリーが大暴れするぞ!



## 第9話・やつあたり（後書き）

次回、ブロリーが荒坂長者やクレイモアの敵をデデーンしまくるぞ！もちろん、お頭もデデーンするぞ！！

## 第10話・プロリモア（前書き）

クレイモアの敵キャラがプロリーに破壊し尽くされます。しかし、オチが……。イスレイの死に様えぐい。しかし、ラキの扱いはおもしろい。

## 第10話・プロリモア

ある日、プロリーは盗賊に襲われている町に舞い降りた！

プロリー

「なんなんだ、ここはあ？」

すると、クレア（幼少）を引きずる男と遭遇した！

リゲ

「なんだ、お前は？」

プロリー

「プロリー……です」

リゲ

「そうか。ところで、このガキを見てどう思う？  
ムカつくから、たつぷり可愛がってやったんだ」

プロリー

「可愛がる？」

プロリーにとっての可愛がる・・・殴る、蹴る、デデーン、キン  
ドーン

プロリー

「気が高まる……。溢れるー!!」

プロリーは覚醒した！

ブロリー

「ふっ！」

ブロリーは奴隷どももろともリグを吹き飛ばした！

リグ

「俺の人生、返せよ！」

ブロリー

「出来ぬう！！！」

すると、お頭が現れた！

お頭

「たとえば、妖魔だろうと、隼の剣で切り刻んでやるよ！！！」

ブロリー

「俺が化け物？違う・・・俺は悪魔だ！！！」

お頭

「俺の隼の剣は、無敵なんだよ！！！」

ブロリー

「その程度のパワーで俺を倒せると思っていたのか？」

ブロリーは緑の玉をお頭にぶつけた！

デデン

お頭

「ママッー！！（中の人繋がり）」

お頭は消滅した！

盗賊

「頭がやられた！逃げろー！！」

ブロリー

「帰れるといいなあ」

ベジータ

「みんな・・・殺される・・・」

ブロリーの緑の玉で、盗賊とベジータは町もろともデデーンした！

ブロリー

「フハハハハ！！！」

町を破壊しつくしたブロリーは、ある山に移動した！

ブロリー

「誰がいるのかあ？」

すると、覚醒者の山男が現れた！

山男

「てめえ、なにしきたんだ！？」

ブロリー

「俺はお前を破壊しつくすまでだ!!」

山男

「なっ!?!」

ブロリーは緑の玉を山男にぶつけた!

山男

「な、なんで?」

デデーン

ブロリー

「ふっ、所詮くずはくずなのだ」

ブロリーはまた出発した。次は海辺の廃墟と化した町にやってきた!  
今度はソーメンが待ち受けていた!

ソーメン

「一気にカタをつけてあげ・・・」

ブロリー

「られると、思っているのか?」

ブロリーはソーメンの首を踏み付けた!  
ソーメンの首は切断された!

ブロリー

「所詮、化け物は化け物なのだ」

ソーメン

「化け物は・・・あなたのほうじゃない」

ブロリー

「俺が化け物？違う、俺はブロリー・・・です」

ブロリーはソーメンの首を掴み、回転して宇宙へ飛ばした！

ブロリーは体を洗うためにある湖にやってきた！

ブロリー

「フハハハハ！！！」

ブロリーはすごい勢いで水の中に入った！

あたりに水しぶきが飛び散る！よく見ると、蛇みtainな覚醒者がいた。

ブロリー

「ん？」

オフィーリア

「あたしが・・・覚醒者にいい！！」

オフィーリアは涙とよだれを垂らしながら叫んでいた！

ブロリー

「汚い・・・です」

ブロリーは緑の玉をオフィーリアにぶつけた！  
しかし、簡単には死ななかった！

ブロリー

「なあに！？」

オフィーリア

「アンタがいなければ、こんなことにならずに済んだのよ」怒

と、やつあたりしてきた！

ブロリー

「（やつあたりとか）なんてやつだ・・・」

ブロリーは仕方なく、

ブロリー

「とっておきだぁ・・・！！！」

と、強力な緑の玉をぶつけた！

デデーン

オフィーリア

「そ、そんな・・・（涙）」

ブロリー

「ハハハハハ！！！」

ラキ

「あんなやつ、生かしておいたら、この世界は破壊し尽くされてしまっ

・・・ふぉあっ！？」



キン ドーン

ブロリーは野宿することにした……。そのころ、荒坂長者の息子が木の上にいた……。

ブロリー

「荒坂長者の息子……？」

ブロリーは気にしながらも眠った。

そして、朝が来て、太陽が昇ってきた。すると、長者の息子は矢を太陽に向かって放った！

息子

「行け……！！」

ブロリー

「なんだ？（起）」

すると、太陽は射落とされたのか、消滅した！

ブロリー

「へあっ！？」

息子

「やった……！！」

「やったぞ……！！」

ブロリー

「さすがだと褒めてやりたい、とても思っていたのか！？」

ブロリーは緑の玉を上空で爆発させた！

デデーン

息子はデデーン なかった。しかし、爆風が強烈で影も形も無くなった！

ブロリー

「所詮、クズの息子はクズなのだ」

長者は悲しんだ。

長者

「年貢は帰ってくるけど、息子は帰って来ん」

ブロリー

「息子が可愛いかな？」

長者

「まあ、ええわい。来年、年貢を倍に取り立てりゃいい」

ブロリー

「・・・とうとう終わりの時がきたようだな」

ブロリーは長者の屋敷に特大のとおっておきをぶっ放した！

長者

「あああつー！ー！ー！ー！ー！」

デデーン

長者は屋敷と米蔵もろともデデーン した！

ブロリーは虫けらを倒すと、不気味な古城に入り込んだ！  
すると、ダフが立ち塞がった！

ダフ

「りふるは、ころさせねえぞ」

ブロリー

「その程度のパワーで、リフルを守れると思っているのか？」

ブロリーはダフの顔を殴りまくった！

ダフ

「いで、いでで・・・！！」

ブロリー

「所詮、クズはクズなのだ」

ブロリーは緑の玉でダフの上半身を破壊し尽くた！  
ダフが死んで、リフルは狂ったかのように暴れだした！

リフル

「うがぁー！！！！（狂い泣き）」

ブロリー

「ふっ！」

ブロリーはリフルの脳天をデデーン した！リフルは動かなくなっ

た！

その時、ルシエラが現れた！

ルシエラ

「よく西のリフルを倒せたわね。

でも、この私……。南のルシエラには勝てない……」

ブロリー

「とても思っているのか？」

ブロリーはルシエラの腹部にパンチを入れた！

すると、口が現れてブロリーの口に噛み付いた！

ブロリー

「なあに！？」

ルシエラ

「驚いた？私の体に触れたものはみんな私に取り込まれるのよ」

ブロリー

「な、なんて奴だ……。！！」

しかし、ブロリーは緑の玉をルシエラの体中にある口の部分に押し込んだ！

ルシエラ

「あゝあゝっ——！！びいやゝあゝあゝ——！！！！！！」

デデーン

ルシエラは消滅した！

ブロリー

「ふふふ・・・フハハハハ！！！」

その時、ライオンみたいな奴が現れた。リガルドである。

リガルド

「お前の戦いぶり・・・。見事だ」

ブロリー

「また一匹、虫けらが死にに來たか」

リガルド

「私は、ベロニカを真つ二つにし、ウンディーネを叩き切り・・・  
フローラを指一本で抹殺した獅子だ」

と、言い終わった瞬間、リガルドはブロリーに頭を掴まれた！

ブロリー

「なんなんだあ、その自慢話？」

ブロリーはリガルドをバラバラに吹き飛ばした！  
すると、矢が飛んできた！

ブロリー

「長者の息子、まだ生きていたのか？」

しかし、そこにいたのはケンタウロスみたいな奴だった。

イスレイ

「お前を倒せば、この世界は平和になるんだ！」

ブロリー

「平和ってなんだあ？」

ブロリーは突進した！

イスレイの右腕が消滅した！

イスレイ

「私の半身をもっていくとは……」

ブロリー

「阪神……？違う……」

ブロリーはイスレイの腹部を破壊した！

イスレイ

「グワアアアッ……！！！」

ブロリー

「おとなしく殺される」

ブロリーはイスレイの左腕をもぎ取った！

イスレイ

「貴様……。手加減というものを知らんのか！？」

ブロリー

「手加減ってなんだ？」

そろそろ終わりの時がきたようだな！！  
特大のとおきだあ・・・！！！！」

ブロリーはイスレイに巨大な緑の玉をぶつけた！

イスレイ

「死にたくないなあ・・・」

イスレイはみんなと楽しく過ごした日々を走馬灯のように思い出しながら朽ち果てた・・・。

ブロリー

「終わったな・・・」

ブロリーが帰ろうとした、その時、リフルが叫んだ！

リフル

「まだ、勝負は終わってないわ！」

ブロリー

「おとなしく殺されていれば痛い目にあわずにすんだものを」

リフルはダフ、ルシエラ、リガルド、イスレイの破片を抱えていた！

ブロリー

「ん？」

リフル

「変形合神！！」

リフルはそういうと、破片と合体した！

リダルドス

「我が名はリダルドス！！深淵なる力で貴様を討つ！！！」

ブロリー

「雑魚のパワーを吸収したとて、俺を超えることはできぬう！！！」

ブロリーはリダルドスを殴りつけた！しかし、効いていない！！

ブロリー

「なあに！！？」

リダルドス

「これで最後だ！！ランストルネード！！！！」

リダルドスは持っていた槍で竜巻を起こした！  
ブロリーは遠くまで吹き飛んだ！

リダルドス

「ブロリーなど、敵ではないな・・・」

10分後・・・。

リダルドス

「で、元に戻らないんですけど」

医者

「知らん」



ラキ

「めでたし　めでたし」

ベジータ

「でしゃばるなといったはずだ」

ベジータ・ラキ

「ふぉあっ!？」

キーン　ドーン!!

テレサ

「はつきりいつて、ついて行けない（笑」

島左近

「よかった。テレサが笑った・・・」

## 第10話・プロリモア（後書き）

動画にしたら、面白いだろうなw・・・で、プリシラが出てこなかったのは、ラキが・・・。

## 第11話・願い（前書き）

最初はドラゴンボールみたいな展開になりますが、後半あたりでラキが自重しなくなる。ラキはクレアよりも、テレサのほうが好みのようだ！

## 第11話・願い

ラグリアスはついに願い玉を使うことにした。

ラグリアス

「では、一つ目の願い。ヘレンを元に戻す」

ダラウス

「あほっ！ヘレン、半分化け物に戻れてよかったね！」

ヘレンはまた半人半妖に戻った。

ラグリアス

「二つ目の願い……。当初は、私の傷を治す予定だったが……。ヒルダが私の体の世話をまだやりたいというので、リダルドスを元に戻したい」

ダラウス

「あほっ！リダルドスは五体に分離したよ」

リダルドスは、イケメン二人と、筋肉と、美女と、ロリババアに分離した！

ラグリアス

「さて、三つ目はみんなから聞いて、抽選で選ぼう」

すると、みんなは自分の中の欲望をさらけ出した！

バク

「みんなの夢をむさぼり喰いたい・・・」

ラグリアス

「お前、声と容姿からは想像がつかんこと言うな・・・」

ミリア

「ヒルダとチームを組みたい」

ラグリアス

「普通に実現するだろ」

タバサ

「隊長を私のものにしたい」

ラグリアス

「妄想の中に留めておけ」

デネヴ

「ヘレンの暴走を何とかしたい」

ラグリアス

「あいつより、クレアのほうが暴走してないか？」

ヘレン

「りんごをたくさんたべたい」

ラグリアス

「毒りんご食って、さっさと寝ろ」

シンシア

「ユマをペットにしたい」

ラグリアス

「もうなってるじゃん」

ユマ

「白馬の王子と結婚したい・・・（涙）」

ラグリアス

「お前、頭おかしくないか？」

イスレイ、コイツと結婚してやれ」

イスレイ

「絶対やだ。そんなブスじゃない。

第一、白馬じゃないし」

ゲドウ

「お前、俺の彼女だろうが！！」

ユマ

「ひいっ！」

いろいろあったが、またアンケートを取った！

クレア

「ラキと再開したい・・・」

ラグリアス

「ちょっとまってな・・・」

ラグリアスはテレサをバニーガールにした。  
すると・・・。

ラキ

「巨乳バニー美女が俺を呼ぶぜ!!  
ふぉあつ!!!!」

キン ドーン

クレア

「ラキ・・・。成長したなあ。身長も、性欲も・・・」

テレサ

「・・・。私の願いは、あの色ボケ馬鹿猿を殴らせてくれ」

ラグリアス

「だから、もっとビツクな夢を言ってくれ」

すると、ゼブラスが物申した。

ゼブラス

「私の夢を実現させてくれ。  
よく聞いておくれよ、ダラウス」

ダラウス

「わかった!」

すると、不埒者がでしゃばり始めた!

ゼブラス

「地球温暖化を」

アガサ

「私に永遠の美貌を」（不埒者1）

ゼブラス

「世界のあらゆる争いを」

ラキ

「巨乳美女クレイモアでハーレムをつくる！！」（不埒者2）

ゼブラス

「この世から」

ヤムチャ

「強くなりたいんだ」

ダラウス

「あほっ！ヤムチャ、強くなってよかったね！」

ヤムチャはめちゃくちゃ強くなった！

すると、不埒者2人が文句を言ってきた！

アガサ

「ふざけるなあああ！！！！貴様ああ！！！！」

ラキ

「クレアの次は、テレサの胸に顔をうずめたかったのに！！！！」

黄門



「ブロリー、ヤムチャ！あの欲ボケ悪党を懲らしめてやりなさい！」

ただ今、ヤムチャとブロリーで欲ボケ悪党を粛清中！

ブロリー

「ふっ！」

デデーン

アガサ

「アガアッーーーー！！！」

ヤムチャ

「特大操気弾！」

ラキ

「ぐぎゃああああ！！！」

デデーン

ブロリー

「終わったな」

粛清が終わったところで、一同は解散した。

クレア

「テレサ……。これからどうする？」

テレサ

「お前と一緒にプリシラをぶっ殺すぞ」

ベジータ

「伝説の超覚醒者は、俺が見つけた次第ぶつ殺してやる!!  
ほおあつ!!？」

キーン ドーン

ブロリー

「ラキめ、おとなしくプリシラの身柄を渡しておけば、ご褒美にテ  
レサの胸を揉めたものを・・・」

変態丸

「だったら、俺がプリシラを・・・」

テレサ

「胸を揉みたいなら、レイチェルに頼め」

変態丸

「嫌だよ、あんなレクセウスみたいな顔の」

デデーン

ブロリー

「あれに関わるキャラとの干渉は許せぬう!!」

その頃、ラキが蘇った!

ラキ

「テレサの胸、揉ませろ!!」

ブローリー

「クズが……。まだ生きていたのか」

その時、ガラテアが立ち塞がった！

ガラテア

「揉むなら、私を揉め！」

ラキ

「嫌だ」

ガラテア

「今日のパンティーの色は黒だが、見たいか？」

ラキ

「嫌だ」

ガラテア

「なぜ、私に興味を持たない？」

するとラキは正直にこう答えた！

ラキ

「お前、でかくてキモい」

すると、ガラテアはラキをぶっ飛ばした！そしてハイヒールのかかとの部分で股間を蹴りつけた！

ラキ

「おおあー！ー！！（悶絶）」

ブローリー

「所詮、くずはくずなのだ」

クレア

「ラキ……。すっかりたくましくなつたと思つたら……。  
お前のステータスは性欲が支配している」

すると、小さい女の子がいきなり現れた！

?????

「ラキを……。いじめたなあー！！！」イスレイ  
「しまった！」

イスレイは何をやらかしてしまったのか、そして突如現れた女の子は一体……。！？

## 第11話・願い（後書き）

最初はユマがいじられキャラだったが、今はベジータやラキ、ヤムチャが打って変わりそうだ……。ラキって成長したが、性欲はもっと性超しているんだろう？

## 第12話・全力で鬱（前書き）

ついに強敵プリシラとの激闘！！伝説のあの人がまさかの敗走に、みんなはどう対抗する！？あいつらがフュージョンしまくる。

## 第12話・全力で鬱

プリシラはいきなりキレて覚醒体になった！

プリシラ

「きさまら全員殺したあと、ラキの内蔵を食らいつくしてやる」

すると、テレサがいきなり本気モードになった！

テレサ

「よくも私が情けを二回もかけたというのに、殺してくれたな。もう容赦しない！！」

ルシエラはラファエラを呼んだ。

ラファエラ

「姉さん？」

すると、ルシエラはいきなり・・・

ルシエラ

「フュージョン！

はあー！！」

すると、ルシエラとラファエラはフュージョンしたしかし、ラファエラはいきなり事だったので、まともに構えることができなかった。

したがって、フュージョンは失敗形態になった。

ラファルシ

「みゃ」

ヘレン

「なに、このぬこ？ちょーかわぴー（デレ」

ラファエラ

「（心の声：すまない姉さん。私がもっとしっかりしていれば・・・」

ルシエラ

「（心の声：別にいいわよ、なんだか好評だし）」

島津義弘

「まずは満足（ぬこパワー全開）」

ブローリー

「お前、違う・・・」

イスレイはプリシラを止めにかかった！

イスレイ

「やめるんだ！プリシラ！！」

プリシラ

「あんた、（性的に）おいしくなかった」

イスレイ

「ショック！！」

イスレイはへこたれた！



ブローリー

「所詮、クズはクズなのだ」

テレサはエラ姉妹のフュージョンを見て、テレサ

「クレア！私らもフュージョンするぞ」

クレア

「ああ。テレサの仇は討つ！！」

すると、ラキは叫んだ！

ラキ

「プリシラを殺さないでくれ！！」

すると、ピッコロが止めに入った！

ピッコロ

「何言ってるんだお前は！？戦う奴らが全滅したら、お前は内蔵を食われちまうんだぞ！？」

そんなこんなしているうちにテレサとクレアはフュージョンしだした！

テレサ・クレア

「フュージョン・・・」

テレサ

「はあ！！」

クレア

「はあ・・・ハークション!!」

クレアはくしゃみをしてしまった!こちらも失敗形態になってしまった!

テレア

「私は、テレア!!」

見た目は幼少クレアだが、二刀流で、妖気を読む力がさらに上昇した!

デネヴ

「見た目は可愛いが、あれで失敗形態!？」

ブロリー

「テレア、可愛い!!」

すると、プリシラは第二形態になった!さっきの形態よりも筋肉モリモリに!

プリシラ

「あたし、獅子や馬よりも、くまさんのがよかった」

ゾルバ

「何!久間さんとな?」

ゼブラス

「デタラメDNA鑑定の犠牲になった者か?」

ブロリー

「違う……。あ、熊だ」

すると、プリシラが挑発してきた！

プリシラ

「ブロッコリーさん、あたしに勝てますか？」

ブロリー

「ブロリー……です」

と、言っていきなりプリシラに突進した！

ベジータ

「やめる！そいつは1000年に一度現れる、伝説の超覚醒者なんだぞー！」

ベジータの警告を無視し、ブロリーはプリシラに殴りかかった！しかし、プリシラは隙について、ブロリーの腹部にパンチを繰り出した！

ブロリー

「カカロットオオオー！！！」

ブロリーは爆発した！！

カカロット

「プリシラのパワーが勝った……。！！！」

ブロリーが倒され、ベジータはさらに絶望した！

ベジータ

「みんな、プリシラに殺される・・・」

リフル

「大丈夫よ。あの子、あたしみたいな小さい女の子には手出ししないみたいよ」

すると、プリシラは

プリシラ

「いくら若作りしても、あたしを欺くことは出来ませんよ?」

と、言ってリフルの体を切り裂いた!

リフル

「ぐぎゃあああ!!」

ダフ

「り、りふるう」

リフルの破片は辺りに散らばった!

ゾルバはすかさずそれを口にした!すると、口の中でうま味が爆発した!!

ゾルバ

「うまい!」

そんなことしていると、プリシラが襲ってきた!!

プリシラ

「パパを・・・パパを返してよ・・・」

ゾルバ

「ま、まさかお前は妖魔一族と人間との間に生まれた娘!？」

ベジータ

「なあに!？」

実はプリシラは父が妖魔、母が人間だったのだ!

ゾルバ

「生まれた時から半人半妖の女・・・。

妖魔一族の恥としてその妖魔は一家の殺害を命令され、妻や長男長女と一緒に死んでるのを発見され、心中したのだろーと思われていたが・・・。まさか、生き残りが・・・」

それを聞くと、プリシラの怒りは頂点に達した!

プリシラ

「お前のせいで・・・パパやママ、お兄ちゃんにお姉ちゃんがあああ!!!!!!」

プリシラは第三形態になった!!!!

その姿は原作にもアニメにも登場していない形態だ!

ゾルバ

「ぐっ・・・」

その凄まじい妖気に、状態異常に陥る者達が!

ラファルシ

「だにゃー！ー！？」

この妖気、ヤバいにゃー！ルシラファじゃなきゃ倒せないにゃー！」

テレア

「ひいひいっ、怖いよお！（涙）」

ラファルシは可愛い猫になってしまったし、テレアはちびクレアみたいに気が弱くて泣き虫だった！

ゼブラス

「面倒だから、ラキを喰わせようか？」

トランクス

「あんな奴生かしておいたら、人間達は食い尽くされてしまう！」

すると、カカロットはみんなから元気を集め始めた！

カカロット

「これで奴を倒す！！！」

ラキ

「やめろおおー！！」

カカロット

「こいつを倒さなきゃ、人類は助からないんだ！！」

カカロットは元気を集めはじめる・・・  
しかし、クレイモアのやつらが・・・。

ヘレン

「おえーっ!!（吐）」

デネヴ

「大丈夫か？実は私も限界に近い・・・」

ミリア

「プリシラ・・・。生まれた時から半人半妖・・・か。呪われた宿命だな」

ようやく、カカロットは元気玉を作り出した！  
すると、プリシラは尖った指をいきなり飛ばしてきた！

カカロット

「くっ、ここで死ぬわけには・・・」

すると、

ラディッツ

「やめろ!・・・ぐはあ!!」

なんと!!ラディッツがカカロットの身代わりで、プリシラのフィ  
ンガーランスを喰らった！

ラディッツ

「カカロット・・・。絶対に、あいつを仕留めろ!!」

ラディッツは死んでしまった!カカロットはその言葉を聞いて、元  
気玉をついに放った!

元氣玉はプリシラに直撃した！

プリシラ

「がぎゃああああ！！！」

元氣玉が当たった場所に大きな穴が空いた。

中央に人間体に戻ったプリシラがうずくまっていた……。

ゾルバはすかさず、プリシラに近づいた。

ゾルバ

「お前を殺さねば……。妖魔一族の恥は……。みんなの怨みは……消えぬ」

すると、プリシラは泣きながら命乞いした。

プリシラ

「し、死にたく……。ないよお（涙）」

しかし、ゾルバの表情は冷たかった。

ゾルバ

「貴様、そういつて情けをかけた者を何人殺してきたんだ？」

プリシラ

「痛いよお、助けて……」

ゾルバ

「そうやって、命乞いした奴をどれほど食い殺したんだ？」

俺はお前に怨みはない。だから、あの世に送ってやる。あっちならお前の家族に会えるだろう。これが俺の情けだ。」



だが、貴様は所詮地獄逝きだろうがな！！！」

ゾルバがプリシラを斬首しようとした、その時！  
誰かがプリシラを助け出した！

ゾルバの剣は地面に深く突き刺さった！

ゾルバ

「貴様は・・・ラキか！？」

ラキ

「なんでそんなにプリシラを殺そうとするんだ！？」

ゾルバ

「これは、人類のためだ・・・。もしも、人間の血が流れている妖魔がいるなどと知られたら、大妖魔がきつと許さない」

一同は大妖魔という、いままで聞いたことのない存在に耳を疑った。

ゾルバ

「だから・・・。そいつを殺させてくれ」

ゾルバが近づいたその時・・・！

巨大なツララが落ちてきた！

ゾルバ

「このツララは・・・、まさか！？」

ハイドレード

「話は聞かせてもらった。我ら大妖魔によって、人間も妖魔も半人半妖も覚醒者も、翩り殺しにしてやる・・・！！！」

上空で話を聞いたハイドレードは、凄まじいスピードで去っていった……。

ゾルバ

「これは……」

ゾルバ達は大妖魔と戦うハメになってしまった！

## 第12話・全力で鬱（後書き）

新たな敵・大妖魔！人類は・・・クレイモアの者は・・・どうなる！？

### 第13話・衝撃的打ち切り（前書き）

突然ですが、このサイドストーリーは今回で終わります。そして新たなサイドストーリーが始まります！

### 第13話・衝撃的打ち切り

ラグリアスは自分も知らぬ大妖魔なる存在を知り、妖魔達に警告した！

ラグリアス

「大妖魔とやらの気をつけろ。奴らの強さ、我ら妖魔を遥かに凌ぐらしい。だから・・・」

ラグリアスが解説しているとき、ゾルバのケータイが鳴った！

ゾルバ

「なんだ？」

ゾルバは電話に出た！女装少年のデスからだった！

デス

「ねえ、パソコンやゲームをいっぺんにやってるやつって・・・、わがままなのか？」

ゾルバ

「ああ？わがままじゃないだろ、普通のことだろ・・・」

よく聞いてみると、デスの声は泣きじゃくっていた・・・。

デス

「だよ・・・ね？」

ゾルバ

「当たり前だ。しかし、お前らしくないな。誰かに言えと脅されたのか……？」

デス

「あの……。エミィコロスっていう、大妖魔……」

ゾルバ

「なにぃー！？大妖魔ぁー！！？？」

すると、妖魔のみんながゾルバを見つめた！

赤マント

「何気に来てみたんだが……。なんだ、お前は……。自重しろよ」

ゾルバ

「なんか、日本に大妖魔が現れたらしい……。エミィコロスってやつが……」

皆は大妖魔と聞いてさらにしりぞいた！

しかし、ゼブラスはエミィコロスについて……

ゼブラス

「エミィコロス……。大妖魔事典で調べていたらあつたんだがな。奴は、機械を拒み、パソコンやゲーム、ケータイを信じられない、過去にしがみつく大妖魔だと……」

すると、ゾルバが物申した！

ゾルバ

「俺が倒しに行きます」

ラグリアス

「ああ、行ってきたくれ」

ラグリアスはゾルバたちを日本へ送った。そして、残ったのはラグリアスのみとなった。

ラグリアス

「遅いなあ、あいつら何やってるんだ？」

すると、城に一人の男が現れた！

ダークラ

「よお、ラグリアス・・・」

なんと、その正体は第9天魔王・ダークラだった！

ラグリアス

「だ、ダークラ・・・。な、何しに来たんだ！？」

ダークラ

「お前を退治しに来た・・・」

ラグリアス

「ちよっ、ちよっと待て！！」

明日まで、明日までお待ちください！！！！」

ダークラ

「できぬう！！！！」

ダークラはラグリアスを吹き飛ばした！

ラグリアス

「アッー！」

ダークラ

「妖魔や幻魔よりも強い、地獄の悪魔が代わりにやるぜ！！！」

ラグリアス

「わ、我が野望がこんないい加減な結末を遂げるとは……。これも妖魔一族の定め……………！？」



### 第13話・衝撃的打ち切り（後書き）

ラグリアス「我らの恨み、次のサイドストーリーで晴らしてくれるわ・・・」

番外編・ラゲリアスが感じた、クレイモアに対する謎（前書き）

久しぶり。だけど、昔のようにゴタゴタしていない・・・。  
ラゲリアスが今まで現れた覚醒者のとある共通点に気づいた！？

番外編・ラグリアスが感じた、クレイモアに対する謎

ラグリアス「サイドストーリーどころか、もはやメインストーリーじゃないか……、『ヘルクライム78柱』ってやつ……!」

ゼブラス「久しぶりなんだから、何かネタを……」

ラグリアス「そうだった!あのさ、12支星獣を見ていたらクレイモアのある秘密に気づいた」

ゼブラス「覚醒者と星座は関わってるんじゃないのかって話だろ?」

ラグリアス「お前が言うなよ……!」

ゼブラス「悪い……」

ラグリアス「まあな、クレイモアに出てきた覚醒者は星座が関わってるんだよ!

例えば山男。あいつってさそり座だよな?」

ゼブラス「あの雑魚のどこがサソリなの?」

ラグリアス「腕の数とか、触手責めとか……」

ゼブラス「まあ、よくわかりませんが……。他には?」

ラグリアス「リガルドは無論、しし座」

ゼブラス「そりやすぐにわかるよ!強さだったらオエルのが圧倒的

だがな」

ラグリアス「そっぴゃテレサ討伐隊のノエルってレオンの逆再生だよな？」

ゼブラス「それはともかく、お頭と中の人繋がりがの武将がいるとか」

ラグリアス「ああ、のことか。まあ、どう考えても闇スネ夫のは変わりないが・・・」

ゼブラス「鮮血のアガサはかに座かな？」

ラグリアス「かに座キャラとしてはインパクトあつたよな。ただ、同じかに座キャラのデスマスクとボルキャンサーが足を引ひつ張ひりすぎなんだよ！」

ゼブラス「イスレイはいて座だよな？」

ラグリアス「うん。あと、ラファエラとルシエラの合成体はふたご座になるよな？」

ゼブラス「乙女座はプリシラかな？」

ラグリアス「・・・」

ゼブラス「どうしたの？」

ラグリアス「詰んだ」

ゼブラス「・・・え？」

ラグリアス「乙女座にあてはまるキャラがプリシラの他にも、ソーマン、リフル、ヒルダ、オフィーリアと……。多すぎるんだよ！  
！」

ゼブラス「オフィーリアはうお座でしょう。あるいはハムレット的なナニカが……」

ラグリアス「鬼武者の真のラスボスの名前、絶対にハムレットだと思うんだが……」

ゼブラス「リフルは水瓶座だろ。ダフ＝水瓶、リフル＝水瓶持つてる人と解釈すればいい」

ラグリアス「無視か……」

ゼブラス「おうし座とやぎ座の覚醒者はダフとリフルによって八つ裂きにされたし……」

ラグリアス「やぎ座出たか？」

ゼブラス「さあ？というか、おひつじ座も出ましたっけ？」

ラグリアス「さあ？ってか、ソーマンのポジションは？」

ゼブラス「ソーマンは天の川。織り姫の星と彦星の近くにあるのはデネヴ」

ラグリアス「ねえ、デネヴとヘレンが姉妹ってマジ？」

ゼブラス「自作自演だろ、ありゃ」

ラグリアス「じゃあ、ヒルダのポジションは？」

ゼブラス「ミリアを見守る星」

ラグリアス「じゃあ、ボーボボは？」

ゼブラス「ザザザーザ・ザーザザ」

ラグリアス「ちなみにイレネという惑星があるらしい」

ゼブラス「惑星イレネから連れてこられたバーロー星人か……。いつかは帰りたいと、星を眺めていたが、いつかは帰れるといいなあ……。(ポワーン)」

ゼブラスはそういうと、惑星イレネに向かってアンサンブル・ブルース(白黒のエネルギー弾)を放った！

デデーン

ラグリアス「やっちゃったよ、この白黒妖魔!!」

ゼブラス「天文学が狂う？冥王星がぶっ飛んでから言え!!」

ラグリアス「できれば、組織の方の冥王星をぶっ飛ばしてくれ！」

ゼブラス「大丈夫！その手の犯罪者には、強力な獄闇毒を流し込んで爆死させるから！たとえ、名前も姿も判らなくても……」

ラグリアス「それはいい考えた。だが、命無き者……いてはならぬ者には効くのか？」

ゼブラス「さあ？」

ラグリアス「いい加減にしろ!!」

すると雑兵がやって来た!

雑兵「申し上げます!プリシラがついに本性を現しました!」

ラグリアス「くそ……。プリシラめ!!ラキと一緒にいたのはクレアを探すため、今までの素直な一面は……。斥候だったのか!？」

ゼブラス「斥候の使い方が怪しいが……。どうする？」

ラグリアス「逃げるんだ……」

ラグリアスはそういうと、カナダにいる妖魔王・ゼイロンの元へ、スタースクリームで逃げようとした!すると、プリシラが現れた!!

プリシラ「どこへ行くの……?」

ラグリアス「お、お前と一緒に、避難する準備だ……」

プリシラ「一人用の戦闘機でか？」

妖魔皇帝・ラグリアス(37)、特大ピンチ!!

番外編・ラゲリアスが感じた、クレイモアに対する謎（後書き）

星座もそうだけど、惑星や神話のキャラも・・・。

ところで、クレイモアの筋肉とオモラシはどこへ行ったんだ？



クリスマス企画！？（前書き）

クリスマスのちょっとした予告???

## クリスマス企画！？

ゼブラス「そーいや、もう少してクリスマスなんだよな……。しかし、ダークラはイスラム圏のトルコ出身だから……。ダークラは去年あたり、クリスマス中止を促す企画をやっていたというが……。もしそうだとしたら……。！！！」

一方、プリシラと出くわしてしまったラグリアスはというと……。某ファミレスでビーフハンバーグを食べていた……。

ダークラ「お前、よく生きて帰ってきたな！」

ラグリアス「プリシラなんてへボだよ！」

絶体絶命のピンチに、ラグリアスは何をしたのかというと……？

プリシラ「どこへ行くの……？」

ラグリアス「う……。ぐ……。(心の声：そうだ！たしかこいつ、家族に会いたがっていたよな？ってことは……)」

プリシラ「答えを言わないと、殺すよ？」

ラグリアス「お、お前の親兄弟を探しに行く準備だ！」

プリシラ「なんだ……。あたしのパパやママ、お兄ちゃんにお姉ち

やんを探そうとしていたんだ・・・。  
ならば、あたしをスタースクリームに乗せなさい！」

ラグリアス「ああ、いいよ！これに乗ればお前の愛する者の元へひとつとびだ！」

ラグリアスはプリシラをスタースクリームに乗せると、上空へ飛ばした！

ラグリアス「ふふふ。プリシラのクズ野郎め・・・。これで異次元へ送ってやる！！！」

アーリア・アクタ・エストーーっ！！！」

ラグリアスはそう叫ぶと、不気味な気体でスタースクリームとプリシラを被うと、強力な風で吹き飛ばした！  
なんと、上空を飛んでいたはずのスタースクリームと機内のプリシラは消えてなくなった！

ラグリアス「どうやら無事に異次元へ送れたようだな・・・。」

ラグリアス「と、いうわけだ！」

ダークラ「プリシラなんて、所詮キ　ガイの覚醒者だろ？」

イスレイ「そうかな？しかし、プリシラのせいで俺の阪神はあのときに負けたんだ・・・。」

ダークラ「お前いつの間に阪神ファンになったんだ!？」

イスレイ「プリシラに半身を吹き飛ばされてから、阪神に目覚めた」

ラグリアス「お前、ひょっとしてギャグに便乗したのか!？」

ダークラ「ラグリアスよ、そんなガチムチウホツな覚醒者は無視して、俺の話を聞け!」

ラグリアス「なんだ?」

ダークラ「お前、俺と一緒にクリスマスをぶっ壊さねえか?」

ラグリアス「何言ってるんだお前!？そんなことしたら、宗教戦争起きるぞ!？」

ダークラ「だから、無宗教のお前と共にクリスマスをぶっ壊すんだ!」

ラグリアス「ああ、私はバイオの力で生まれた妖魔だからな・・・」

そんなことを言っていると、懐かしのあのキャラが現れた!

リュウハク「某英国女性はレプティリアンとぼざいたのは誰だ!？」

ダークラ「おお、リュウハク!久しぶりだな!!」

リュウハク「リーマン兄弟のつじつまを合わせるのに手間取って、

なかなか出られなかったのだ・・・」

ラグリアス「リュウハク、なぜ今更やってきたんだよ！」

リュウハク「ダークラがクリスマスを破壊しつくしたいとか言い出してきてな・・・。ちと面白いと思つてな」

ダークラ「だから、零皇帝・オエルはオメガ達に任せといた」

リュウハク「しかし、子供の夢を踏みにじることなど出来ぬよ！」

ダークラ「クリスマスを迎えられない子供だっている・・・。だから、俺はクリスマスはプレゼントをもらえと思つているクソガキどもに絶望を見せてやりたいんだ!!」

リュウハク「うむ！クリスマスとほざく人間どもに絶望を見せてやるぞ!!」

ラグリアス「宗教戦争になったらどうするんだって!？」

リュウハク「なあに、部下が何とかしてくれるわ」

ラグリアス「まあ、いいか。我ら三傑が久しぶりにそろつたんだ。例のあれをやるぞ!」

ダークラ、リュウハク、ラグリアスは持っていた剣を重ね合わせた!

リュウハク「で、企画はどこでやるんだ?」

ダークラ「もちろん、『ヘルクライム78柱』でやるんだよ。24

日・25日の2日連続だ！」

ラグリアス「なに！？では、『幻魔と妖魔』はただの広告がわりか！？」

ウェイトレス「あの・・・。当店へ凶器を持ち込むのはおやめください！」

ダークラ「シュワット！」

はたしてクリスマスは破壊されてしまうのか！？

## クリスマス企画！？（後書き）

ネタバレになるけど、クリスマスを破壊しようとしたダークラの元に第7天魔王のフランドールがやって来て……。みたいな感じになる。（結果的にクリスマスは破壊されない？）

## 現実と空想が織り成す時（前書き）

題名がロマンチックだけど内容は・・・最後のほうは意味不明すぎる合唱になつとる。



## 現実と空想が織り成す時

ラグリアス「まったく、クリスマスのせいでまた厄介な敵が増えちまったな・・・」

リュウハク「メイドの『お帰りなさいませ、ご主人様』が、わしにとってはMAXハッピーホリデーなプレゼントだった・・・」

ダークラ「過ぎ去った過去は忘れて、ある企画をやらうと思う。

題して、『現実と空想が織り成すとどんなことになるか?』」

ラグリアス「なんだよそれ!? 意味がわからんから、詳しく説明してくれ」

ダークラ「要するに、戦国 双やってると、人を殺してもいいという感覚に囚われる・・・。

という勘違いに惑わされ、ゲームⅡ悪と思念に囚われた馬鹿のことをいうのだ!」

ラグリアス「わかった!」

リュウハク「ダークラ、オヌシは例えが理不尽なやう!」

と、いうわけで三人は現実と空想がごちゃまぜになった時に起こりうる現象を挙げてみた!

ダークラ「例えば『ドラえもんが何とかしてくれる』かな？」

リュウハク「どこでもドアで宇宙へポイ！ってか？」

シャモ星人「ドラえもんなんて、蒼い悪魔さ！」

ブロリー「チッー！」

ブロリーは邪魔なシャモ星人をデデーン した！

ダークラ「『ダークラが何とかしてくれると思った』と言っていれば、殺した相手を俺がソセイガで生き返らせてやったのよ……」

リュウハク「あとは『悪魔にとりつかれてやった』とかな？」

ラグリアス「たしかヤギだかウサギだかヒツジだかの名前の奴が言ってたんだよね？」

ダークラ「そういう言い訳するやつ事態が悪魔。とりつく側にある。そして、人にとりつくとか……。そんな芸達者な悪魔はあまりいない」

ラグリアス「他は『一撃で殺せると思ったが中々死ななかった』とかか？」

ダークラ「凡人が簡単に敵を殺害出来るわけがない。一撃で敵を倒すには、攻撃力が相手の防御力を圧倒的に上回る、スターを使う、一撃必殺を駆使するとかだな。こんなこと言ってる俺も危ないかもしれない」

リュウハク「なあに、安心しろ！この世界では日常茶飯事ではないか！なにせ細菌にだってHPがあるのだから」

例：オリゼー・HP0・0000003

ダークラ「他に『リセットすれば生き返る』という、なんともチートすぎる名言があったりする」

リュウハク「人生は一度きりだというのに・・・」

ダークラ「でも輪廻で人生をリセットしても大丈夫かな？

・・・別の存在として生きることになるが・・・」

ラグリアス「そんな恐ろしいことはどうでもいい」

リュウハク「どうでもいいのか!？」

ダークラ「あとは『全ての人間は凡人と天才の二種類に分けられていて、天才は新世界のためなら人を殺してもいいし、新たな法律を作る権利を持つ』と、いう理論」

リュウハク「わしは天才に入るかな・・・？あ、ドラコニアンだから、人間には入らないではないか・・・」

ラグリアス「私も妖魔だし・・・。大体、同種との戦いは躊躇する」

ダークラ「クレイモアはその同種を斬り殺してるやんけ!」

ヘレン「はあ？何言ってるんだお前!？あたしたち、人間だぜ!」

ブロリー「でやっ!!」

ヘレン「どわっ!？」

ヘレンは左目を攻撃された!

ヘレン「ブロリーこそ、妖魔そのものだ・・・」

ブロリー「俺が妖魔・・・? 違う・・・。俺はブロリー、です」

ダークラ「まだまだあるぞ! 『三成、頑張ってね? (by 福島正則)』とか」

孫悟空「かつ! 気持ちわりい・・・。嫌だ、その武将!」

パラガス「お前の言う通りだ・・・」

リュウハク「ハートマークとか、大丈夫か!？」

ラグリアス「確かに、あの顔でそんなセリフ言われるとか、死の宣告喰らうよりもキツイ」

ダークラ「なにせ、どーしよーもないっ馬鹿だからな」

ラグリアス「馬鹿と」

リュウハク「大馬鹿と」

ダークラ「どーしよーもないっ馬鹿で・・・」

左近「馬鹿力が出せますよ」

クレア「馬鹿と」

ヘレン「大馬鹿と」

ユマ「どーしよーもないつ馬鹿で・・・」

左近「馬鹿力が出せますよ」

ベジータ「馬鹿と」

孫悟空「大馬鹿と」

ブロリー「どうしようもないばあああああかあああああ！！！！・・・で」

左近「馬鹿力が出せますよ。大切なことなので三回いいましたよん？」

現実と空想が織り成す時（後書き）

他にも書こうと思ったネタがあつたけど、思いだし次第また書くつもり。後悔はしていない・・・。

## 二次元の世界へ（前書き）

ダークラ達が二次元の世界へ行くといいだした！果たして彼らは二次元の世界へ行くことが出来るのか？

そして、笑劇の結末が！？

かなりハザードがキテるので、注意！

## 二次元の世界へ

ダークラ「おまえらは、二次元の世界に行きたくはないか？」

変態丸「行きたいよ！とつても」

リュウハク「たしか、アウターリミッツにもそんなネタがあったな・  
・・」

ダークラ「二次元行きたい奴、この指に止まれ！」

すると、大勢の人がダークラの指に止まった！

ヘレン「二次元の彼氏と結婚するのが夢なんだ！」

ミリア「私も二次元の世界へ行き、永遠の１７歳として・・・人間として生きたいと思っているんだ！」

クレア「私と同じ考えの奴がいてくれて嬉しいよ」

ヘレン「きひひ！」

ブロリー「オタクの女・・・！？」

芹沢「オタク文化は、男だけのものではない・・・！！」

藤本「そういうアンタも二次元へ行つて、フサフサの髪の毛を手に入れたいんだろ？」



芹沢「ぐっ!!」

ダークラ「二次元の可能性は無限大です。さあ、みんなで二次元へ行く方法を考えましょう!」

みんなはダークラに大喝采した!・・・一部の者を除いて。

デネヴ「馬鹿馬鹿しい」

トランクス「みんな、何か勘違いをしていないか・・・?」

ベジータ「どれ、俺も参加するか・・・」

トランクス「ダメです!あんな話にのつては・・・!!」

ベジータ「二次元好きを気持ち悪がる奴はついて来なくてもよい!」

ベジータはそういうと、『二次元の世界へ行こうの会』の一員となった!

みんなは二次元の世界へ行く方法を話し合った!

ヘレン「ぺっちゃんこになって、紙に張り付くつてのは?」

ダークラ「それを言ったら、ヒラメやカレイは二次元の生き物か?」

変態丸「えっ!?あの魚つて、二次元からさ迷いこんできた生き物じゃなかったの!?!」

クレア「そんな訳無いだろ！！二次元の魚にあんな厚みがあるわけがない！」

リュウハク「確か、アウターリミッツでは電磁波を駆使してオサーンを二次元へ送ってたぞ？」

サーチャー「二次元へ行きたい者をデータ化して、プログラム生命体加工すればいいのでは？」

リュウハク「無視か・・・」

ダークラ「それはいい考えだ。しかし、それは可能なのか？」

サーチャー「二次元の世界でなら実現可能です！」

ダークラ「それじゃあ、意味ないんだよ！」

ヘレン「ああん、早く二次元の彼氏と結婚したいい」

ラグリアス「その彼氏を三次元化するのはダメか？」

ヘレン「ダメに決まってるでしょ！三次元は困難が多すぎるもん！」

ミリア「二次元に行けなかったら、妖魔皇帝のお前に死んでもらわなければならない」

ラグリアス「なんで！？！？」

ブロリー「俺は二次元へ行き、宇宙を何度も破壊し尽くすだけだあ

！  
」

ダークラ「二次元ならば、またリセットでやり直せる……。三次元には存在しない特長だ」

ラグリアス「そして、二次元の産物は無限に増殖できる！三次元も出来ないことはないが、数に限りがあるだろう」

リュウハク「コピー機能か？」

ゼブラス「私の分身も、この機能があれば無限に増殖可能だ……」

変態丸「俺も百体になりたい！」

ダークラ「ただでさえ邪魔なお前が百体も増えたら、目障りだ！」

変態丸「わーん（泣）」

ダークラ「その憎しみ、悲しみも……。二次元へ行けばなくなるんだ！……条件次第で……」

クレア「ダークラ、お前は人を二次元へ送る魔法とか習得していないのか？」

ダークラ「残念だが人を二次元へ送る魔法はない。しかし、人を性転換する魔法、万物の病気やケガを治す魔法、食べたい物を好きなだけ出せる魔法とかなら習得している」

リュウハク「オヌシ、そんな魔法を持っているなら、それを平和に活用することは出来ぬのか？」

ダークラ「それはどうでもいい」

ラグリアス「とりあえず、理論を出し合っていてもらえただから、ぶっつけで二次元へ行ってみよう！」

ダークラ「まずはパラガス、お前が行け！」

パラガス「いいぞお！」

パラガスは一人用のポットに入った！

ダークラ「実験その1・超高速で萌えアニメにぶつけたら入れるか？」

見ると、テレビで萌えアニメをやっていた！

ブロリー「親父い・・・」

パラガス「いいぞお！」

ブロリーは萌えアニメに向かってパラガス入りのポットを投げつけた！

テレビはパラガスもろとも爆発した！

孫悟空「ダメだ！」

ダークラ「まっ、そうなることはわかってたけどさ・・・」

リュウハク「実験その2・すごい力で漫画にたたき付けたら、二次元へ行けるか？」

孫悟空「ベジータ、行け！」

ベジータ「ダニイ！？」

ブロリー「フハハハ！！」

ベジータ「ふぉあ！？」

キーン ドーン！！

ベジータはブロリーによって漫画にたたき付けられた！しかし、ベジータは漫画には入れなかった！

リュウハク「無論、これらの行為は遊びに過ぎぬ」

ダークラ「二次元が我らを誘拐してくれば・・・」

みんなの妄想が怪しくなってきたのを心配したラグリアス。何を思ったのか、いきなりダークラに殴り掛かった！

ラグリアス「コタツ零式！！！！」

ゴーン！

ダークラ「邪魔だぁぁあっ！！！！」

ダークラはラグリアスを殴りとばした！すると、トランクスが介入してきた！

トランクス「あなたたちは、すでに二次元の住人ではないですか！」

ダークラ「すっかり忘れてた！！！」

トランクス「なぜ二次元に行く必要があるのですか！？三次元へ行くのならまだしも」

リュウハク「なんだ、もともと二次元ならばこんなことする必要はなかったではないか！」

こうして事態は解決した。

## 二次元の世界へ（後書き）

結果：二次元の住人は二次元へ行こうとは思わないこと。元々、自分が住んでいる次元なのだから・・・。

## 二次元の世界へ・補足（前書き）

ついさっき、二次元の世界へ行く方法がわかった。実はあのキャラが二次元と三次元へ行き来出来たのだ！  
そのキャラはみんながよく知っている、あのお姉さんだよ！



## 二次元の世界へ・補足

前回、「二次元の世界へ」で自分達はすでに二次元の住人だったことに気づくというオチだったが、考えてみれば二次元と三次元を行き来できる奴がいたではないか！

山村貞子という女が！！！！

なんで今まで気づかなかったんだろう・・・？なぜ貞子がすぐに思い浮かばなかったのだろうか・・・。それが1番わからない！

とりあえず、貞子に頼んでテレビの中に引きずり込んでもらえばいいのだ。電磁波で二次元の世界へ行くよりもはるかに安全だと思わないか？まあ、貞子がいい人だったらの話だが・・・？

よくよく考えると、貞子の倒し方って簡単じゃない？出てくる前にテレビ消せばいいし、ビデオをぶっ壊せばいい。ぶっちゃけ言うところ、リングの内容はよくわからないので、電源消そうがコンセント抜こうが全く効果がないという展開があるのならば、テレビをぶち壊してしまえばいい。

はつきり言つと、貞子は他のテレビに入れるのだろうか？つまり、再生しているビデオ以外のテレビに侵入出来るかということ。もしも出来ないのであれば、行ける二次元はあの井戸のところだけであり、非常に狭い世界となってしまう。

結論からすると、貞子は……。ん？ちよつと待てよ？貞子は確かに自分の精子を自分の卵子に受精して自分を生み出すことができたはず。ならば、その子供を別の二次元へ送り込めばいい話ではないか！そうすれば例えば自分がその二次元ごと滅んでも、他の二次元にいる娘が生き残ってくればまた増殖することが出来るという利点があるではないか！なんというミステリークレイフィッシュだ！

というか貞子さん、もうビデオから卒業して、D T Dやブルーレイに移行したらどうだ？そうすれば画質が良くなってパワーアップ出来るかもしれませんよ？

そして、他の二次元へ行けるようになれば、どれほど多くの人々を救済できるか分かりますかな？金儲けに利用するか無料で実施するかは貞子次第だが、化け物としてではなく、聖女として崇められることになるのは間違いないだろう。そして自分と同じDNAを持つ娘や孫と一緒に幸せに三次元の住人として暮らせるようになれるといいね！

## 二次元の世界へ・補足（後書き）

戦国無双3で山村貞子を作った。ロン毛がないとかマジありえねーから！

だからポニーテールになった（´。°。、）

## 好きなものだけ食べていたい（前書き）

これは、ラグリアスがダークラを助けにいく最中におきた出来事である・・・。

今回は下ネタ、グロ、残虐なシーンがあるので注意しよう！あと、ほとんど題名通りじゃないぞ！

好きなものだけ食べていたい

ラグリアスは戦闘機で京都へ向かっていた。そのとき！大きな鳥が現れた！

大鳥「があっー！があっー！」

ラグリアス「じゃ・・・邪魔だヴォケ！！！」

ラグリアスの魂の叫びも虚しく、大鳥のクルミをぶつける攻撃によって戦闘機は墜落してしまった！しかし、ラグリアスはなんとか生きていた！

ラグリアス「なんとか助かったが・・・。戦闘機はめちゃくちゃだ！よくみると、30個くらいパーツが紛失している！！一刻も早くパーツを取り戻さないと、新幹線で行くことになってしまう！」

ラグリアスはさっそくパーツを捜しはじめた！三時間後、気合いでパーツを20個取り戻した！

ラグリアス「ぜえぜえ・・・。こんなに苦労しておきながら、あと10個も残ってる！」

ラグリアスがそうつぶやいていると、突然クレアがハリセンで高速剣をぶちかましてきた！

クレア「何やってるんだ！」

ラグリアス「こっちのセリフだ怒阿呆！！！！私のしなやかな髪の毛

が一瞬でボサボサになったぞ!？」

クレア「ところでお前はどんな食生活を送っている？」

ラグリアス「全力で話そらしやがった!! ( ; )」

クレア「今日、何食べた!？」

ラグリアス「えーつとまあ……。ハンバーガー四個は喰った……」

クレア「信じられん!! なんとという栄養バランスの悪さだ!!!!」

ラグリアス「人間の内臓しか喰わない妖魔よりはマシだろ! パンとかついてるんだからさ!」

クレア「それでも肉が大半を占めている!!」

ラグリアス「そんなのはどーでもいいから、戦闘機のパーツとか持っていたら教えてくれよ!」

クレア「私は持っていないが、ヘレンは持っていた……」

ラグリアス「じゃあ、今すぐ呼べ!! そのパーツを渡してもらっぞ!!!!」

クレアは早速、ヘレンに電話した!

クレア「大至急、大阪に来てくれないか?」

ヘレン「ちょっと待ってな――！」

三時間後・・・。

ヘレン「待たせた？ごめん！」

クレア「待たせすぎ」

ラグリアス「ヒマだったから、パーツ探してた。すると5個見つかった。残り5個見つければ京都へひとつとびできる！」

ヘレン「ふーん」

ヘレンは何食わぬ顔でフライドチキンを喰っていた・・・。

クレア「ヘレン！また今日もフライドチキンとリンゴとビールで夕飯を済ませたな！」

ヘレン「なんだよ！あたしの食生活に文句つける気か！？」

クレア「脳梗塞で死ぬぞ！？」

ヘレン「別に脳梗塞になったっていいもん！そんなにいうなら脳梗塞になって死んでやる！！」

ルヴル「お前らみたいな奴らで戦死せずに病死する奴は珍しいな」

ラグリアス「ところで、私のパーツはどこだ？」

ヘレン「はあ？パーツは知らないけど、タコ焼きを入れるのにつつ

てつけの容器はあるぜ！」

ラグリアスはその容器を見て愕然とした！なんと戦闘機のコックピットのガラス部分の先端のパーツだったのだ！

ラグリアス「馬鹿かお前！！それは小綺麗なガラスの器かなんかじゃないぞ！！！」

ヘレン「へっ？」

ヘレンは豆鉄砲を喰らったような顔をした！

パラガス「お前のアホ面、お笑いだぜ！」

ラグリアス「山田アアアアツツ！！！！（邪魔だアアアアツツッ！！！！）」

パラガス「どうわっ！？（ぶっ飛び」

ラグリアス「これでパーツは26個になった！あと四個あれば京都へひとつとびできる！」

ヘレン「あと四個のパーツってなんなんだよ？」

ラグリアス「サラマンダーコンロ、ノームドリガー、ウンディーネポンプ、シルフファンネルの四つだ」

ヘレン「うつひゃー！ボスキャラみてーな名前のパーツなんだな！」

ラグリアス「サラマンダーコンロは周囲の敵を瞬時に焼毒し、ノー



ムドリガーはドリルで地面に大きな地割れや地響きを起こし、ウンディーネポンプは放出する水圧弾で地上の存在をも溺死させ、シルフファンネルは敵を地平線の彼方まで吹き飛ばすほどの風を巻き起こす」

クレア「おい、ノームドリガーって、あいつが使ってる奴か？」

ラグリアスはクレアの指差すほうを見た！ラグリアスは恐るべきものを目の当たりにした！

野獣「イグイグイグイグ、ンアッー！」

なんと見ず知らずの野獣がアッー！に使っていたのだ！！！！！！

ヘレン「おえーっ！！（吐）」

ラグリアス「てんめえーっ！！！！き・・・汚ねえだろ！！！」

ラグリアスはエネルギー弾で野獣を吹き飛ばした！

野獣「ンギモディ」

ラグリアス「全く・・・くそみそだよ、これ・・・」

ヘレン「あたし全力で泣いていい？（半泣き）」

ラグリアス「あと三つ・・・どうする？」

すると、またクレアが言い出した！

クレア「ウンディーネポンプって、あいつが使っている奴か？」

ラグリアスはクレアの指差す方向を見てみた！すると、全裸のレイチエルがウンディーネポンプから噴出される水圧弾をシャワーみたいに浴びていた！

レイチエル「ああ！このシャワーを浴びていると、明日もゴルフで頑張ろうって気になる！！！」

ラグリアス「歪みねえんだよ！貴様の筋肉は！！！」

ラグリアスはエネルギー弾でレイチエルを吹き飛ばすと、ウンディーネポンプを取り返した！

ヘレン「筋肉といえはいたな！そのパーツと同じ名前のウンディーネっていう奴が・・・」

ラグリアス「ふーん・・・」

ラグリアスが何気に話を受け流すと、またクレアがつべこべ言ってきた！

クレア「ラグリアス！シルフファンネルはあいつが持ってるぞ！」

ラグリアスはクレアの指差す方向を見た！すると、恐ろしいものを見てしまった！

ダフ「えへへへ・・・。ぶーぶー」

なんと、ダフの尻から生物学上ありえない風力で屁が出ていたのだ

！さらに、その屁はすつきりとしたミントの匂いだった！

ヘレン「へっこき嫁さんみてえ・・・」

ラグリアス「あのゴミクズが！！」

ラグリアスはダフの背中から内臓ごとシルフファンネルを引っこ抜いた！！！！

ダフ「ぎゃあああああっつ！！！！（泣）」

リフル「ダフううう！！！！（涙）」

リフルは絶叫しながら泣き叫んだ！

ヘレン「ひでえ・・・！！」

クレア「あ・・・悪魔だ・・・！！！！」

ラグリアス「俺が悪魔・・・？違う・・・。俺は妖魔皇帝だ！！ガハハハハ！アハハハハハ！！覚醒者がゴミのようだ！！！！ギャハハハハ！！！！！！」

リフル「許さない！！牙突零式！！！！」

ラグリアス「ならばこっちはコタツ零式！！！！」

ラグリアスはそういうと、リフルの体をバラバラに砕いた！

リフル「ぐうう・・・」

うごけなくなったりフルを、ラグリアスは食べだした！！

ラグリアス「いただきまわす！・・・ああぐ！！モグモグ、クチャクチャ、ガツガツ、ムシヤムシヤ・・・。ぷはーっ！うまかった！  
！ごちそうさま」

ラグリアスは腹一杯になった！

クレア「お前、リフルを食べちゃうくらい強かったんだ・・・」

ヘレン「まさに妖魔<sup>げどう</sup>皇帝！！！！」

ラグリアス「さてと・・・。残るはサラマンダーコンロだけか・・・

」

ラグリアスはブラブラ歩きだした！すると知らないおじさんが寝転がっていた！

金子「グーグー」

ラグリアス「ここで寝てると、風邪ひくぞ」

ラグリアスは優しくも厳しい口調で警告した！よくみると、そのおっさんは腹の上にガスコンロのようなものを置いていた！

ラグリアス「これは・・・サラマンダーコンロ！」

ラグリアスはそう叫ぶと、サラマンダーコンロをおっさんから取り上げた！すると寝ていたはずのおっさんが突然絶叫した！

金子「くそつたれえええっ!!!!.....グーグー」

ラグリアス「驚かせやがって!」

ラグリアスはそういいながら、戦闘機の元へと戻った!そして四種の神器を翼の部分に取り付けると、出発の準備を شدした!

ラグリアス「これで京都へ行ける!なんか買ってきてほしいお土産あるか?」

ヘレン「スズメの丸焼きとか、ハツ橋とか.....旨いものならなんでも!」

クレア「ラキを探してきてくれ!」

ラグリアス「ラッキーの卵が欲しいのか、うんうん!」

クレア「??(。Q。)??」

ラグリアスはなんだかんだ言つと、戦闘機に乗って行ってしまった!

ヘレン「組織をぶつつぶしたら、次はラグリアスを殺るのか?」

クレア「.....何やら京都で恐ろしいことが起きそうな気がする.....特に四種の神器.....あの兵器からとてつもなくまがまがしい“何か”を感じた」

ヘレン「おーい、聞いてる?」

クレアの感じた不吉な予感、四種の神器のまがまがしい何か・・・。  
一体、この先、どうなってしまうのだろうか？

好きなものだけ食べていたい（後書き）

実は「ヘルクライム78柱」のPV・10000越え達成記念だったりする。

もしかすると、クレアの中の人ネタだったりするかもよ？？

## ラグリアスの無間なる挑戦（前書き）

久しぶりの投稿になるな。話が進むにつれて前半の内容が薄くなり、手抜きに……。あのキャラの意外な断末魔が！？



## ラグリアスの無間なる挑戦

ある日、ラグリアスは作者のマンネリ化にいらだっていた！

ラグリアス「あの……。私、いつまで戦闘機に乗っていないとまらないのだ？」

ナレーター「ラ帝にミサイルをぶち込むから、待っているだってさ」

ラグリアス「ラ帝ってなんぞ？」

ナレーター「神聖ラグリー帝国の略称だお（　　＾＾）」

ラグリアス「おい、ちょっと待て！一体誰が我が家にミサイルを！？日にちは??」

ナレーター「どうやら妖怪の仕業らしい。日にちはスパイを使ってください」

ラグリアス「いかん！私は国を守らねばならん！！国を守ることが皇帝としての指名！だから帰る！！！」

ラグリアスはそういうと、神聖ラグリー帝国へと帰還した！

ナレーター「これで……。よかったのか!？」

浅井クリープス「そう、それでいい」

なんと、浅井はクリープスという黒い妖怪と化していた！

浅井クリープス「ふふふ！私は海苔みたいな黒い手になったぞ！！  
！どうだ？うらやましいだろ！？」

ナレーター「関係ない話はいいでしょう」

浅井クリープス「なん・・・だと・・・！？」

ナレーターと浅井クリープスが押し問答をしているころ、ラグリアスは自宅へと帰っていた！

ラグリアス「むしゃくしゃして帰ってきたが・・・後悔はしていない！」

ラグリアスはそういいながらラグリー城へと舞い戻った。しかし、だれもいなかった！

ラグリアス「おい！なんでいないんだよ！？自宅警備員すらないのか！？」

ラグリアスがそう叫んでいると、床に手紙が置いてあった！

ラグリアス「手紙・・・？なにに、」ラグリアスが帰ってくるまでキャバクラで遊びほうけよう！・・・帰ってきたぞ、おい！！私は帰ってきたぞ！！早くスパイを雇わないと、ミサイル喰らうぞ！！！！」

ラグリアスが嘆いていると、100メートル先に妙な本があることに気づいた！

ラグリアス「なんだこれは？」

ラグリアスは本を手にとると、適当に読みはじめた！

ラグリアス「なに？トン、トンカラ、トンカラトン??」

ラグリアスが本の内容を適当に言っていると、日本刀を持ったミイラが現れた！

トンカラトン「てめえ！俺の名を言ってみろ!!」

トンカラトンはそう叫ぶと、ラグリアスに斬りかかった！ラグリアスはすかさず持っていた剣で攻撃を防いだ！

ラグリアス「なんなんだ、この邪悪なエネルギーは!!!!???」

トンカラトン「くくく！我が攻撃を喰らった者はトンカラトンになるのだ――!!」

ラグリアス「心の声：何を言っているんだ、こいつは!?!?自分が強いとも思ってるのか!?!?」

ラグリアスはそう思いながらも、トンカラトンの日本刀を弾き飛ばした！

トンカラトン「やべっ・・・!!」

ラグリアス「終わったな！砕け散れ!!波動玉碎砲!!」

ラグリアスはそういうと、手から巨大なビームを放った！トンカラ

トンは消滅した！

ラグリアス「ダメだ……。戦国“鳶怪獣”やっていたからスランブになっちまったのかな？」

ラグリアスはあまりの展開のくそぷりに血へどを吐きながらマラソンしたくなった！もしも可愛い幼女が自分の娘だったらか考えたりもした！が、あーだこーだしていても先へ進まないの、またさっきの本を読んだ！

ラグリアス「さっちゃんはね、サチコっていうんだ、ホントはね……。」

ラグリアスが歌詞を読んでいると、鎌を持った幼女が現れた！

さっちゃん「貴様の手足、切り刻んでやる！！」

ラグリアス「なんだ貴様は！？さっちゃんなのか……。！」

さっちゃん「バナナをくれれば助けてやる！」

ラグリアス「ならば、我が頭から生えている巨大な角でも喰らうがいい！」

さっちゃん「ならば、遠慮なくいただく！！！」

さっちゃんはそう叫ぶと、ラグリアスの頭の角をバリバリと食べた！

ラグリアス「ふざけるな、おい！！！！私の高貴な角を食い過ぎだよ

！  
」

さっちゃん「アテンション・バナン」

ラグリアスはバナンという言葉聞いて愕然とした！バナンとはラグリアスから追放したはずの妖魔だった！

ラグリアス「あいつ、大妖魔を蘇らせようとしていたからな……。それも妖魔と化した遠藤家をな……」

ラグリアスがつぶやいているにも関わらず、さっちゃんはラグリアスの角を全て食べていた！

ラグリアス「貴様、私の兜の角をキレイに喰うとはどういうことだ！？  
」

さっちゃん「腹一杯になったから、お前の手足をちょん切ってやるよ！――」

ラグリアス「黙れ小僧！！貴様はおとなく死んでいればよかったんだ――！！」

ラグリアスはそういうと、さっちゃんを地面にたたき付けた！

さっちゃん「ぐふっ！？」

ラグリアス「朽ち果てる！！雷光魔人弾！！！！」

ラグリアスは両手から強大なエネルギー弾を放った！

さっちゃん「ぐがきやあああ！！！！」

さっちゃんは跡形もなく消し飛んだ！城も大破してしまった！！！！

ラグリアス「全く……。何だったんだよ、さっきのサチコDXは！？」

ラグリアスは愚痴をこぼしながらも、本を読み進めた！

ラグリアス「大妖魔トクージに気をつけろ！奴は酒を飲むと攻撃力が馬鹿に上がり、防御力が馬鹿に下がるそうだ。今はキオウという奴になっているだろう……」

ラグリアスが読み終わると、大妖魔トクージが現れた！

トクージ「なんだてめえは！？俺を呼び出して何になるんだ？」

ラグリアス「こいつが大妖魔！？何と言う妖気だ！覚醒者と互角……いや、それ以上か！？！？」

ラグリアスが戸惑っていると、トクージが殴り掛かってきた！

トクージ「オドリヤー！！！！」

ラグリアス「ふんっ、簡単にはやられんよ！！！！」

ラグリアスはトクージの拳を受け止めた！すると、とんでもないダメージを受けた！

ラグリアス「な……。なんなんだ、このパワーは！？攻撃を防いで

もダメージを受けるとか・・・」

トクージ「何を言っているんだ、てめー!?!」

トクージはそう言いつつ、城に置いてあったウォッカを瓶ごと飲み出した!

ラグリアス「げえっ!アカーン!?!」

トクージ「一撃で潰してやるから、よけんじゃねーぞ!?!」

トクージはそう叫ぶと、再びラグリアスに殴り掛かった!

ラグリアス「こうなったら、殴られる前に撲り倒す!?!」

ラグリアスは覚悟を決めると、上空へ高く飛んだ!

トクージ「てめえ!?!よけんじゃねーよ!?!」

ラグリアス「よけてほしくなければ、この攻撃を食らえ!?!五重の極み!?!?!?!」

ラグリアスはそう叫ぶと、トクージを殴りつけた!

トクージ「ぐおうあがあああつつつ!?!?!?!」

トクージは絶叫すると、大爆発した!トクージの爆発は地球の大地を大きく震わせた!

ラグリアス「ぜえぜえ・・・。まったく、なんなんだあのジジイは

！？しかしジジイながら大妖魔の力、おそろべし！！もはや妖魔にはないのだろうか？まあ、妖魔の終末が来る前に女妖魔を娶らねばならんなあ・・・」

ラグリアスが独り言を言っていると、あの本が目の前に落ちてきた！ラグリアスは思わず驚いた！

ラグリアス「なんなんだよ、この本は！？読むたびに化け物は出てくるし、爆発に巻き込まれても燃えないし・・・。また読んだら何か出てくるんだろうな。嫌だなあ、読みたくないなあ・・・。でも読みたくなるのが妖魔の性だ！こうなったら、一番マシな奴を読むか！」

ラグリアスはそう言うと、本のページをペラペラとめくり、1番マシそうな奴を見つけた！

ラグリアス「これなら大丈夫かな？・・・『私は死んだ。しかし、市を置いて逝くことはできない。私は悲しくなった。すると、私の魂は海苔みたいに薄っぺらい体になってしまった。足はフクロウナギみたいな貧弱なものになり、腕は細長く手の平は大きくなり、全身も真っ黒になってしまった。しかし、私はそれでも構わない。大切な市を護れさえすれば・・・』」

ラグリアスが本の内容を言い終えると、浅井クリースが現れた！

浅井クリース「ついに・・・私が出ることになったか」

ラグリアス「さあ来い！お前を浄化してやる！！そして無間地獄へぶち込んでやる！！！」



浅井クリープス「お前が今まで読んでいた本……。あれはお前を倒すために科学者に作らせた召喚本だったのだ！しかし、こうなつたからには私直々にお前を倒して、市を助け出してやる！」

ラグリアス「何を言っているんだ！？お市なんてやつ、人質にもしていなければ誘拐もしていないんだけど！？」

浅井クリープス「黙れ！お前は多くの者達を……。！」

ラグリアス「うるさい！！確かに妖魔や覚醒者のエネルギーを取り入れたりはしたが、お市なんか吸収した覚えはない！」

と、その時！突然バナンが自重という言葉を知らないかのような顔をしながら乱入してきた！

バナン「いやいや、なんだか調整していた魔人どもがどこかへ行つてしまうと思ったら、あなたがその本で呼び出していたんですね！」

ラグリアス「バナン！てんめえー！！！！」

バナン「まあまあ、そんなに怒りなさんなつて！」

ラグリアス「この海苔みたいな奴が、私を嫁泥棒呼ばわりするんだけど！」

バナン「あれ？私に対する怒りではなく、そちらさんに対する怒り？」

ラグリアス「うん！そだよー」

バナン「そうですか。ならば、そのお方がなぜ怒っているか、お市がなんなのかを教えて差し上げましょうか？」

ラグリアス「速く教えろ！私は戦闘機を駆使して日本のコンビニへ行き、エロ本を・・・じゃなくて、仲間を助けに行かねばならないんだからな！」

バナン「そうですか。それはどうでもいいとして、秘密を知りたければ条件がありますな」

ラグリアス「うでもいい・・・だと!？」

バナン「今から行つ勝ち抜きバトルを制してもらうか、3億ループル払ってもらうかですね。まあ、私的には後者のほうが最も楽だと思いますがね」

ラグリアス「ぶっ！ふざけんなよ!!!3億ループルって、我が帝国にある資金の半分じゃないか!そんなの聞いたらどう考えても前者を選ぶ!!!!!!」

バナン「いいんですか、それで?もしもそれをクリア出来なかったら、あなたのエロ本は全部もらいます。確か女子高生モノが多かった気が・・・。いつかヘルクライム78柱の女子高生達を喰うつもりじゃないでしょうね？」

ゾード武田「全部喰っちゃった」

ラグリアス「今一瞬、何か出てこなかったか?・・・しかし、女子高生は私の命だ!私から女子高生を奪うのは・・・やめてくれえ!!!」

バナン「ボヤッキーみたいですね……。まあ、いいでしょう！で  
は勝ち抜きバトル、レッツ・カモーーン！！！」

こうして、ラグリアスの勝ち抜きバトルは始まった！！

ラグリアス「さあ、来い！今の私は何でもKILL！！！」

バナン「では、まず手始めにリグとお頭でも呼びますか」

バナンはリグとお頭を呼び出した！

お頭「斬首の傷は……。ラグリアス。キ・サ・マ・に・ふさわしい  
ーっ！！！！（レベル100）」

リグ「お頭！奴に地獄を与えてやってくれ！（命令口調）」

ラグリアス「ぶっ！お頭の様子がおかしいぞ！？」

バナン「お頭とリグは人間だから、改造してレベル100にしまし  
た」

お頭「半兵衛様、武器をパクって申し訳ございません！！！」

お頭はそういうなり、隼の剣では斬りかかってきた！

ラグリアス「こらあ！！無茶すんな！！！」

タコ博士「コンピューターが弾き出したデータによりますと、お頭  
は三成状態ですじゃ」

リグ「ネタバレ野郎は消えろおー！ー！！！！」

リグはタコ博士を叩き潰した！

タコ博士「うわへへ・・・アッー！（死）」

ラグリアス「てめえ！！！！いい加減にしろ！！」

お頭「貴様のその目、許さない！！死んでもアイツラを守ろうとする目だ！！！！」

ラグリアス「アイツラって誰！？」

リグ「貴様はそれが何なのかを知らずに死ぬのさ！」

リグがそういった瞬間、ラグリアスはリグの首を掴んだ！

リグ「なんだこの手は！？俺の親父は俳優なんだ！こんなこととして許されると思ってるのか！？」

ラグリアス「この手を離してほしかったら、アイツラが誰なのかを話せ。嫌なら・・・腕一本だ」

リグ「わ、わかった！俺、死にたくない！！から教えてやる！！」

お頭「ネタバレは許さない！！」

お頭はそう叫ぶと、リグの心臓を貫いた！

リグ「ぐっ……！……ここ様、俺に……テレサのぱふぱふをくく……」

リグはそついうと、爆発した！

ラグリアス「うわへへ！！（手の中でリグが爆発した驚き）」

お頭「よくも俺の仲間を！ラグリアス……ラグリアス……  
ラグリアス……！！！」

ラグリアス「だから何なんだお前は！？自分で仲間を殺しておいて」

お頭「バナン！……ここ様とアレを！」

リフル「ああ、あたしが呼んでくるわ」

ラグリアス「あれ？お前は確か私が喰ったはず？」

リフル「アンタが寝てる間に口から出てきたのよ！！アンタにはいるいと貸しがあるからね。フフフ……！」

ラグリアス「……また喰うまでさ！」

お頭「よそ見をするな！いえや……ラグリアス……！！！」

ラグリアス「いま、違う名前言ったよな！？な？」

お頭「俺は今、別キャラのアフレコをしてるからその癖があつて……  
……ついつい……」

ラグリアス「じゃ、あの剣幕はハツタリか」

ラグリアスはそう言うと、お頭を切り裂いた！

お頭「あ・・・あれ？（死）」

バナン「お頭・・・。実力は確かなんだが、お頭なだけに頭が・・・（苦）」

お頭が死んだ後、こころ様とジャージードビルが現れた！

こころ様「うひひ！心が欲しいか？」

ジャージードビル「ヒヒーン！」

ラグリアス「アレってジャージードビルのことか。ゲリユオンだったら負けてたかも」

バナン「ゲリユオン・・・。たしか、あのゲームにも女子高生みたいな奴が・・・」

こころ様「心が欲しいか？性欲が欲しいか？金欲が欲しいか？物欲が欲しいか？」

ラグリアス「キモいんだよ！この豚野郎！！！」

ラグリアスはこころ様を切り裂いた！しかし、刃はこころ様の体脂肪の前には無意味だった！

ラグリアス「奴の体・・・切り裂けない・・・だと！？」

こころ様「デヘヘ！俺様の脂肪は刃を遠さねえんだ！」

ジャージーデビル「ヒヒーン！」

バナン「これはラグリアス、いきなりピンチ！つかジャージーデビル、『ヒヒーン！』ばかり言っていないで奴を攻撃しろよ！パトリシアか！？」

こころ様「グヒヒ！しねしね！！」

こころ様はそういうと、馬鹿でかい手でラグリアスを殴りつけた！

ラグリアス「ぐおうあー！ー！！」

ラグリアスはぶっ倒れた！

ラグリアス「くっ・・・金なんて・・・払いたくねえよ！」

ラグリアスがそう思っていると、心の中に惨殺されたとされるロシア皇帝の娘達が現れた！

オリガ「頑張れ頑張れ出来るって！そこで諦めちゃダメだって！

アナスタシア「うるさい姉ですみませんねラグリアスさん。私は、あなたに国を捨ててもお逃げになってほしい。あの者達が狙っているものは、あなた様の命なのですから」

家康「忠勝、ボルシュビキはやべえ。人の心を捨て、妖魔になってまでお前を狙ってるみてえだ。だからそんなことにならないように、

わしはとある場所で引きこもっておる」

ラグリアス「可愛い娘が出たと思いきや……。家康……。家康ウウウー！！！！」

ラグリアスは大声で叫んだ！魂を揺さぶるかのように！！

こころ様「なんだ、てめ？」

ラグリアス「貴様、私に『なんだ、てめ？』って、言えた義理かー！！！！？」

ラグリアスはそういうなり、こころ様の腹を蹴りまくった！すると、こころ様のお腹がめちゃくちゃへこんだ！

こころ様「どわあ！！に、肉があ……。！？」

ラグリアス「喰らえ！！魔人雷撃！！！」

ラグリアスはこころ様の腹に向かって電撃を放った！

こころ様「で……。でじゃぶ！！！！（死）」

こころ様は粉々に吹き飛んだ！

ジャージーデビル「ヒヒーン！」

ラグリアス「ニンジンやるから仲間になってくれ」

ジャージーデビル「ヒヒーン！」



ジャージーデビルは仲間になった！

バナン「お頭、あなたの馬は裏切りました……。お頭が力を持て余した結果ですな！」

ラグリアス「おらぁ！次はなんだ！？」

バナン「こんどはあの二人組でも呼ぶか！」

バナンはオードリーとレイチエルを呼び出した！

オードリー「あなたはオモラシのオードリーと春日のいるオードリーのどちらを選びますか？」

レイチエル「なんで今まで俺を出さなかったんだ！？」

ラグリアス「うつわ。もうクレイモアシリーズかいな！」

レイチエル「お前みたいなイカれた野郎は俺が殴り殺す！」

オードリー「さあ、来い！ここがお前の死に場所だ！！」

ラグリアス「雑魚でしょ、あんたらww」

レイチエル「ナメんな！！！」

レイチエルは力の限りにラグリアスを切り付けた！しかし、ラグリアスはことごとく攻撃を粉碎した！

レイチエル「ぐっ！」

オードリー「何やってんのよ！このノータリン、穀潰し、筋肉脳、ゴリラ！」

レイチエル「・・・ひどい！」

レイチエルは相方に馬鹿にされてメソメソと泣きながら帰ってしまった！

オードリー「私って一人だけじゃロクに戦えないオモラシガールじゃないのよ・・・（涙）」

ラグリアス「死ぬか？」

オードリー「ごめんなさい・・・ごめんなさい！」

オードリーは血と汗と涙と小便を垂らしながら逃げていった！

ラグリアス「さすがに・・・。弱体化しすぎてレベルじゃない。特にオードリーの扱いがムゴい」

バナン「あんな小物、生きていても価値ないし」

ラグリアス「おい！そんな言い方はないだろ！！ユマよりはマシだろ！ユマよりは！！」

ユマ「・・・」

バナン「ラグリアスは優しいんですな。あんなゴツくて結婚できない

い図太い乙女にウルトラファイティングスペシャル情けを賭けるとはね！」

ラグリアス「ただしデュートリヒやミアータにはその情けの100倍の情けをかけてやる！」

バナン「ラグリアス様は、女子高生好きだし、ロリペドだし・・・救いようがありませんな。私は熟女ペドだけど」

ラグリアス「ごちゃごちゃ言っでねえで、敵を出しやがれ！」

バナン「ならば新参組の髪型へんてこ女でも呼ぶか・・・」

バナンはニーナとルネを呼び出した！

ラグリアス「ニーナ・・・すっかり忘れてたわ」

ニーナ「てめえ、子供じゃねえな？」

ルネ「・・・もはや私の手に負える状況ではないな・・・。逃げるんだ！勝てる訳がないよ！！」

ラグリアス「おい。クズが本気で、まだ強い方がヘタレてるってどういうことなの・・・？」

バナン「知りませんな。にしても、ニーナのアホ毛とルネの垂れ目と唇がユマに似てるんですが・・・。まさか、ユマさんパクりました？」

ユマ「私がパクられただけだし」

バナン「別に褒めてないよwww」

ユマ「（；；；）」

ラグリアス「早くダフを出しやがれ！あいつ位しかいねえよ、私と張り合える奴は！」

イスレイ「（；；；）」

リガルド「（；；；）」

ラグリアス「リガルド？リカルドじゃなかったっけ？？」

その時！突然ニーナが影追いで迫ってきた！

ニーナ「死ねオラア！」

ラグリアス「たしか奴は相手の妖気をたどり、息の根を止めるまで止まらないというチート技の使い手！これはどうしたらいいんだ？」

バナン「大気圏まで上昇して、地面へ突進するときに奴を巻き込めばいいんじゃない？」

ラグリアス「サンキュー！バナン」

ラグリアスはそういうと、大気圏へ一気に突入した！ニーナも後を追うが、空気が薄くて苦戦した！

ニーナ「苦しいっ！」

そんなことを言っていると、ラグリアスが突進してきた！

ラグリアス「これで！最後だああああっ！！」

ラグリアスは地面への着地にニーナを巻き込んだ！

ニーナ「体が！！燃える！熱いつ！！！焼けるうーーーー！！！！」

ニーナは絶叫しながら燃え尽きた！そしてラグリアスはヘタレているルネの尻に向かって着地した！

ルネ「ぐえおあーーーーっ！！！！（圧死）」

ルネは潰れた！というか、神聖ラグリー帝国の領土が吹っ飛んだ！

ラグリアス「倒したぞ！次出せ！！」

バナン「あなたが着地したときに、岩石が何百個もぶつかったんですけど・・・（怒）」

ラグリアス「そう邪険になるなよ・・・」

ヘレン「ふっ、妖魔皇帝！おでれたぞ！！おめえ、つええんだな！さっ！第二試合始めっか！！！！」

ラグリアス「お前、喋り方がおかし（ry）」

ブロリー「カットオオオオーーーー！！！！」

ここからは断末魔だけをお楽しみください。

ヘレン「ち．．．きしょ．．．う」

デネヴ「死生に、生あり．．．残念だね」

クレア「ラキ．．．生きる．．．」

ミリア「私は．．．17歳．．．!!」

タバサ「死ぬときは．．．隊長の胸の中で．．．」

シンシア「こうなるとは．．．思ってたから．．．」

家康「〔ユマの死骸に向かつて〕忠勝うー！ー！！（泣）」

ガラテア「嫌いじゃなかったぞ、お前のアホ面．．．」

クラリス「ミアータ、お母さん．．．もう駄目．．．」

ミアータ「あなたが殺したのね．．．パパとママとママ（クラリス）  
．．．」

レイチエル「我が．．．新しい．．．国を．．．!!!!」

オードリー「所詮は組織の捨駒．．．か」

ディートリヒ「私の命って．．．一体．．．〔心の声：ラグリアス  
ってロリコンじゃなかったの!?〕」

アリシア「再起．．．不能．．．」

ベス「姉さん・・・！（涙）」

シド「ちきしょおおお！！！！」

ガーク「結局、ガラテアよりチビのまま終わってしまった。拙者、不器用ですから・・・」

ラキ「クレアは・・・俺が・・・」

ここからはスーパー過去の者タイム。

ウンディーネ「素のあたしを・・・見てほしかったなあ・・・」

ジーン「のび太に・・・ご飯作ってあげないと・・・」

フローラ「クレアなら・・・きっと風斬りを・・・」

ポニーテールの人「作者に名前を忘れられ、この死もまた・・・忘れられるんだろうな・・・」

ソフィア「今日が落日か・・・」

ノエル「死体は残さない・・・そう、決めているんでな」

テレサ「女神よ・・・私に・・・慈悲を・・・！！」

イレエネ「私の好きなサッカー賭博ないのか、バーロー・・・」

オルセ「カーミンって言われたから、死ぬか」

ルヴル「ラキ含め、奴隷商人にさらわれた者たちは南の奥地へと消えて行った……。彼らの人間としての人生は閉じた。ここから先は悲惨の一語」

リムト「頭の血管を剃刀で切られた。黒い血が出てる。これが私の血の色か……。最期に良いことを知ったな……」

ここからは覚醒者タイム。

山男「生まれ変わったら……。メガスクイドになりてえな……」

ソーメン「あんた……。化け物……」

ヒルダ「エルダではない……。はず。私、ラグリアスのこと……。好きだった……」

オフィーリア「お兄ちゃん、今そっちさ行くだよ……」

リガルド「死ぬ前に……。ミリアの胸を……。触りたかった……。『クレア・ヘレンの胸は触ってる』」

アガサ「眉毛がないのは罪か……。？グフツ！」

イスレイ「死にたくないなあ……」

リフル「なんだか……。眠たくなってきた……」

ダフ「だれものぞまぬけつまつたな……」



ルシラファ「……」

バナン「手抜き+こんなにクレイモアキャラを屠ってどうするつもりですか？」

ラグリアス「夕飯のおかずにしたらどうだ？「小学生」女子高生枠」

バナン「そういや、まだ倒していない奴いるんじゃない？」

ラグリアス「いたか？」

バナン「……プリシラ」

ラグリアス「そいつは確か、異次元へ追放したから大丈夫」

バナン「プリシラなら異次元くらい簡単に破壊できるんじゃない？」

ラグリアス「はは……。まさかな……」

バナン「そうそう！ラグリアスに渡しておくものがあつたんだ！！」

ラグリアス「最初から言えよ！」

バナン「ダークラからの手紙だ」

ラグリアスはバナンからダークラの手紙を受け取った！内容は「オメガに壮大なイタズラをしたいから、オメガの目の前で俺を殴れ。そのあとは、もっと面白い事になるだろう」と、いうものだった。手紙を読み終えたラグリアスは静かに戦闘機に乗った！

バナン「戦闘機に乗るといことは・・・行くんですね？」

ラグリアス「何がしたいんだろうな、あいつ・・・」

ラグリアスはしぶしぶダークラのイタズラに協力することにした。  
そのイタズラが全世界を揺るがす事態を引き起こすとは知らずに・・・。

## ラゲリアスの無間なる挑戦（後書き）

作っているうちに一万文字を超えていた。一昔前に作った6000文字耐久レースが夢のようだ……。このあとの話は、あれに繋がっている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6587h/>

---

幻魔と妖魔

2010年10月12日14時05分発行